
異世界の彼方へ

†カイト†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の彼方へ

【Nコード】

N4284K

【作者名】

十カイト十

【あらすじ】

俺は気が付いたら神と名乗る少女と出会っていた。

これは「新たな世界に御招待のらー」なんてふざけた少女に異能を貰って異世界を生きていく物語である。

異世界で最強とも言える異能力を手に入れた少年のお話です。

神との遭遇（前書き）

はい！新たな物語が始まります！

まあ、ストーリーは暇な時に考えているので暇つぶし程度に見てくださいw

6 / 1 0 訂正加筆。

神との遭遇

『おい…ここどこだよ』

俺こと、一ノ瀬 翔は見知らぬ真っ白い世界にいた…。

「少年クーン！こっちなのら〜！！」

声が出た方角をみると…

「あ、やっと気づいてくれたのら〜！」

ロリ少女がいた…

それも、真っ白い服を着た…ぶっちゃけ小さな天使に見える

『……………』

ロリ少女を凝視する俺

「どっしたのら〜？」

首をコテンと曲げてこちらを見てくるロリ少女

『……………』

俺は、此処で一つひらめいた…。

「大丈夫のら〜？」

頭に疑問符を付けているロリ（めんどくさくなったので、以下ロリ）

『…声がしたのに誰もいねえな』

とりあえずロリの存在を無視することにした。決して反応を楽しもうとか下心は無い…はず。たぶん、きつと、メイビー。

「ええ！？存在無視！？あれだけ私を凝視してたのに存在自体無視のらか！！？」

（ぎゃーぎゃーうるさいんだよ…発情期ですかあ？）

「それ初対面の少女に対する言葉じゃないのら！」

口に出していないから言葉じゃない…思いた…！

「なんで胸張ってるのら！？とゆうか話を聞いてほしいのら…！」

そこ…五月蠅いぞ…！

「ええ！？絶対私は悪くないのら！」

マジ、勘弁してください…子供を苛める趣味はありませんから。

「思いつきり苛めてたのら…！とゆうか、私の名前はロリではないのら」

へえ…だから？

「…まあいいのら。とりあえず、全て説明するのらよ」

…ふむ。しょうがない。ここからは、真剣に聴こう。

「…うむ。私の名前は、ネオ。”全ての原初にして創りし者”。君達の所では所謂”創造神”と呼ばれている者のら…。で、君を呼んだ理由…それは」

そこまで言って、一回深呼吸をする口り。

『それは？』

一応俺もその空気に乗る。

「私が新たに創った新世界で暮らしてほs『死ね…この変態口り野郎！』危なッ！？いきなり、殴りかからないでほしいのら！とゆうか、変態って何処で決めたのら！？」

…チツ、こいつ避けやがったぜ。

「本当に怖いのら！…ゴホン、とりあえず落ち着くのら」

そう言われたので…。

「うん、だから落ち着くのら…その上に振りかざしている拳を下げるべきのら」

…ふう。しょうがねえな。

「やっとわかってくれ』とりあえず、あと5発な』…って、解って

なかった！全く持って理解してなかったのら！？」

どうでもいいけど、話止まってるぜ？

「…君が話の腰を折ってくるからなのら。じゃあ、続きを話すのらよっ。」

そう言ったので、頷く。

「私がさっき説明した通り、新世界で暮らしてほしいのら。まあ、その世界は”魔法”や”魔物”など言われるモノ。所謂、君達で言うファンタジーの世界になっているはずのら。憧れるのら？」

ファンタジーな世界か…確かにあこがれるな。

「魔法はまだいい…だが、魔物がいるとなると厄介だ。俺は一般人パンピーな訳だ。ここで問題です…俺の言いたい事はなんでしょう？」

そう言うつと理解していたのか頷き、答えた。

「…魔物達に一般人では太刀打ちできないとゆうことのらね？そこは、問題無いのら…君には、いくつかのお願い事を叶えてあげるのらよ。」

…お願い事？それって…。

『その願い事で、力が欲しいと望めば力を貰えるのってなところか…』

そう言うと、ロリは笑顔で頷く。

「そのら。頭の回転が速くて助かるのらよ…とりあえず、今願
事を考えてほしいのら」

…ふむ、何にしようかな。

〈頭フル回転で作案中〉

『…よし、できた。今から言っから願事と言っわ』

・生命力無限：所謂、不老不死。

・code：breakerに登場するキャラクターの全ての能力
を扱え、使える。

・code：breakerに登場するキャラクターの特技を全て
扱え、使える。

・code：lostは一切なし

・code：endも一切なし

・創造する力（考えた物全てを創れる）

・亜空間を扱える力

…こんだけかな？

「…解つたのら。あ、1つ言つとくのもの…創造の力は”無機物”だけ。簡単に言つと生物は創れない…OK?」

ふむ…まあ、別段困らなそうだしいいか。

「じゃあ、少しおでこを出してほしいのら」

そう言われたので、おでこを差し出す。

「少し頭痛がするかもだけど耐えるのらよ?」

そう言つて、俺のおでこに手を翳す。

すると、淡い光が俺のおでこに触れた。その瞬間、ズキンと頭痛がしたが1瞬だけだったのでなんとか耐えれた。

「ふう…とりあえず、これで終わりのら。じゃあ…はい」

そう言つて、ロリは俺に

『ケータイ?なんで?』

携帯電話を渡してきた

「だって、何か困つたことがあつても新世界に行けないし…今の時代連絡手段は必要のら。困つた時には電話するのらよ?番号にちやんと登録しているのらから」

『…ありがとな』

意外と心配されてることに驚きつつも笑顔でお礼を言うと驚かれた。

『俺だって、お礼はするぜ?』

そう呆れた顔で言うと、少しおかしそうに笑った。

「フフフ…そうだよな。じゃあ、そろそろ送るけど…最後に一つだけ…」

一瞬の間が開き、言葉が紡がれる。

「私のことを信じてくれてありがとう。いってらっしゃい」

そんな言葉を受けた俺は

『おう！行ってくる』

そう笑顔で返した。

近くに設置されていた淡い光を発する魔法陣に乗った瞬間、俺は静かに光に包まれ 俺の存在はその世界から消えたのだった。

異世界最初の創造 (前書き)

6 / 10 修正加筆。

異世界最初の創造

青く発光する魔法陣が地面に展開され、魔法陣の上には1人の男が乗っていた。

『…ここが新世界？』

思わずそう呟く男、一ノ瀬 翔。

翔の目前に広がっていた光景は本当に人類が住めるのかと思うほど想像を絶していた。

荒れた大地 波打つ海 濁るような曇り空

『…普通森じゃねえのか？』

小説などでは、森から始るもんだと思ってたんだけどな…。

そう呟きながら頭を掻く。

『…とりあえずは現状把握か』

そう呟き自分の格好をみてみた。

一ノ瀬 翔のプロフィール

容姿：黒髪黒眼で基本的な特徴はない。中の上。

年齢：18

身長：185cm

体型：可もなく不可も無く。着やせするタイプ。

服装：黒色の和服に黒い下駄。

『…どんだけ、黒尽くめ?』

いや、黒好きだけどさ…着たことも無い服装にため息を吐いていると袖の中が振動している事に気づく。
振動する元を探す様に袖の中をゴソゴソと手を動かし、手にしたものは

『…スライド式携帯かよ。しかも黒だし』

そう呟きながら画面を見ると…、

「天才美少女創造神 ネオ」

…どっから突っ込めばいいんだ?

とりあえずは電話らしいので通話ボタンを押す。

『もしもし?』

「やっとでのら〜」

『何か用か?』

「そつそつ。頼みじとのら」

『頼みじとのら』

「うん…森創って欲しいのら」

『…はあ?』

「いや…はあ?じゃなくて、森創って欲しいのら」

『…理由は?』

「…他の星で手が回らなくて」

『自己管理しっかりしろ』

「…もつともです…そんなわけで、森創ってほしいのら」

『いや…無理だろ』

「…何で?」

『植物って生き物じゃん』

「あぁ…制限無くなってるよ?」

『…いつの間』

「携帯を触った時から」

『…はあ、別にいいけど』

「…じゃあ、よろしく〜」

『待てい!』

「何?」

『創る方法教える』

「んつと…想像するだけ」

『…そんだけ?』

「そんだけ」

『了解…てゆうか、動物は?』

「それは、私がやるよ」

『なんで、動物だけ?』

「森とか飽きるでしょ!」

『森に謝れ!』

「…めんなさい!」

『お前にプライドは無いのか!?』

「プライド?神にそんなものは無い!」

『…威張っちゃダメだろ?』

「じつともです…じゃあ、森をよろしくおねがしますのら」

『…はあ、りょーかい』

会話終了と共に電話を切る。

…とりあえず、創造神^{あいつ}は当てにしちゃダメだな。うん。

『んつと…確か、想像すればいいんだよな？』

そう呟き、目を瞑る。

『……………』

頭の中で、緑色の木々を想像する。

『創造』

そう呟いた瞬間　パシツと軽い音が聞こえ、気が付けば俺を中心として魔法陣が展開し地平線の彼方まで広がっていた。

『…マジかよ』

そう呟いた時には、俺自身が森に囲まれていた。

『…はあ　まさか、自分が森を創るなんてな』

前の人生では、味えなかったな　。

自分の身に起きた不思議な体験に少しだけ笑みを出して出来たての
木に凭もたれかかる。

『とりあえず…少し寝ようかな』

そう眩き眠りについたのであった。

異能力の制御L V ?
(前書き)

6 / 1 0 修正加筆。

異能力の制御Lv？

プルルル

『……………』

プルルルルル

『…ん』

プルルルルルル

『…うるせえ』

強制的に眠りを妨げた 携帯の画面を見る

『…アイツか。って、今度はメールかよ』

そう呟きながら、携帯を操作してメール画面を開く。

『んつと…って、マジで？』

創造神から来たメールの文を見て目を疑った。

メールの内容はこちら。

「全くいつまで寝てるの？翔君が寝てから500年ちょっと経った
んだけど…てゆうか、動物も既に創ってるから襲われなかったのが
不思議なくらいだよ。」

という訳で、人間誕生まで後1000年くらいしかないから…能力を体験して制御する事、これが出来なかったら、翔君の能力に制限がつくから…主に使えない的な？

ジャッ！そうゆうわけなので…異能力制御がんばってね〜」

…やべえ 突っ込みどころ満載過ぎて突っ込めねえ…。

てゆうか、俺500年も寝てたのか…それに、1000年で能力習得すんの？大丈夫か俺…？

『…うん、まあ。多分、大丈夫だろ』

とりあえず、やれば出来るだろ。出来なかったら…いや、止めておこう。鬱になるし。

*

出来ると思ってた若き頃の俺…今過去にいけるならぶん殴りたいぞ。

『やべえ…能力が操れねエ!!』

メール受信から2000年経った現在まで、覚えた異能は”音・磁力・水態・影”

つで、今現在進行形で…、

『…周りが火の海だな』

大神の青い炎を覚えようとしたら、近くの木々に炎が一気に広がって火の海になりました。

…てか、これ自然破壊だよな。

そう思いつつ片手を目の間に翳^{かざ}して詠唱。

『エタニテイゼロ
永久凍結』

そう呟いた瞬間、燃えていた木々が瞬間凍結する。

…初めてこの技を使った時は俺が死にそうだったな。まさか氷の中に　いや、止めよう。過去の傷は抉るべきではない。

『とりあえず…衝撃波で氷を崩すか』

すうつと息を吸い込み

『はああああ!!』

周りに向かって、大声を出す。

すると、あら不思議！周りの氷が一気に崩れ出し雪崩を造り俺に襲いかかってきた…。

『…うん。気にしないでもう一回挑戦するかな』

ポツと音がして左腕に青い炎が纏わりつく。

『…行くぜ』

そう言って、雪崩に向かって左腕を突っ込ませる。

刹那、ジユウと水分が蒸発する音がし雪がどんどん溶けていく。

…炎はもう行けるな。

そう確信して、一度左腕を雪から抜き即座に詠唱。

『出て来い！雷狐ライコ！！』

なんだ？名前がそのまま…？俺にネーミングセンスを期待するなよ。まあ、そんな事はさて置き俺の隣に九本の尻尾を生やし電撃を纏った九尾が俺をじっと見ている。

『んじゃあ、ここ一帯の雪を溶かしてくれ』

九尾に要件を伝えるとコクリと頷いて

キユウウウウウ！！

空に吠えた瞬間、九尾の身体から9本の電撃が周りに向かって迸ほとばしる。

ジユウウウと雪が一気に蒸発して周りに白い煙がたちこめた。

『…あんがとよ。また何かあつたら呼ぶわ』

その言葉を聴いてコクリと頷いた九尾はシュンと光り輝いて消えた。

『とりあえず、炎は完璧だから次の技行ってみるか…』

そう一人つぶやいて、新たな異能を身につける為に頑張るのであった…。

異能力の制御L V ? 前半(前書き)

能力は次第に覚えていきます！

6 / 1 0 修正加筆。

異能力の制御Lv? 前半

（雪崩事件から更に100年後）

『とりあえず…300年も何も食ってねえのに空腹が一切ないって何?』

最早怪物だろ…俺。あ、今更ですね。わかります。

『とゆう訳で、今日は狩りに行きたいと思います!!』

大声が静かに木霊し、なお一層人氣が無いことを確認させる。

そして気分が少しブルーになりながらも森の探索へ出かけたのだった…既に森の中だけだね。

*

散策開始から30分経過

『まあ、まだ始まったばかりかな』

未だ動物見つからず。

散策開始から1時間経過

『ま、まあこれからだろ！』

未だ動物の一部すら見つからず。

散策開始から2時間開始

『…まだこれからだ』

未だ動物の巣すら見つからず。

搜索開始から5時間経過

『…お願いだから見つかったください…』

未だ動物の気配すら見つからず。

翔。精神的ダメージを負う

搜索開始から10時間後

『…もういいよな？俺頑張ったよな？』

未だ動物の姿すら見つけられず。

精神的打撃で泣きだす寸前で

ヴ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ

『
…獲物の声だな』

搜索開始から15時間経過…獲物の声を拾う。

肉体的ダメージ…全回復。

精神的ダメージ…全回復。

『獲物が俺を待っているぜ!!!』』

声のした方角へ本気ダッシュをしていくのであった…

*

ところかわって、目の前にいるあるのは…、

『…洞窟?』

ぼっかりと穴が開いた洞窟があった。

あれ?この後の展開がヤバい様な気がする…。

『まあ、気の性かもしれんが…』

とりあえず、気にしても無駄なので洞窟に入るのであった。

洞窟の中でポツリポツリと水滴が落ちる音が響く。

それに加えて、時折獣の様な唸り声が洞窟の奥深くから聴こえてくる。

『…俺の予想が正しければ、会いたくねえ相手だな』

そう呟きながら早歩きで奥深くへと進むこと数分…、

『…分かれ道か』

何…？この迷路^{ダンジョン}

右か左か…さてどっちだ？

『なんとなく右で』

そう言つて、右の奥へと進んでいく

右へ進んで程なくした頃…。

ヴオオオオオオ

獣のような雄叫びが次第に大きくなってきた。

…もうすぐか？

そう思いつつ、早歩きから走る事へと切り替えて声の主へと向かっていく。

『…ん？』

徐々に目の前に小さい光が見えてくる。

俺は光を見えた瞬間、その場に立ち止まる。

『…この先進みたくねえな』

だって光の先から…

ヴウウウウ

食糧^{オレ}を早く食べたい食べたいと言っているかの様に声を抑えてるし…怖いよお。

『なーんて…とりあえず、行くか』

そう言いつつ光を目指してと歩いてく。

光に近づくとつれて、目の前の風景が見えてくる。

そして、ついに光に包まれ　ドーム状の空間が顔を出した。

しかしそこに住もうモノは血のように紅い体と紅い眼で獲物^{おれ}を真っ直ぐ見据えていた。

『ドラゴン様に御対面…ってか？』

呟かれた言葉に答えるかのようにドラゴンは雄叫びをあげた…。

異能力の制御？

後半（前書き）

6 / 1 1 修正加筆。

異能力の制御？ 後半

ヴオオオオ

ドラゴンの咆哮するたびにビリビリと空気が震える

『…てゆうか、落ち着いてる俺ってすごくね？』

ラスボス的な存在感を放つドラゴンに對峙している俺を褒めてほしいよ。ま、俺以外だれもないけど。

てゆうか、初めの相手がスライム的な雑魚ではなくラスボス的なドラゴン様ってなんね？

イジメか？イジメだよな…うん、イジメだね。

そんな事を頭の隅に永久保存して、對峙しているドラゴンを再度確かめる。

目の前の相手は自分よりも比べ物にならないくらいデカイ。

多分だけどマンション3階くらいのデカさだな…

『とりあえず、話せばわk』

そこまで言うが後は続かなかった…何故なら、

『あぶねええ！！』

ドラゴンの尻尾が俺に向かってきたからだ。

まあ、ギリギリで上に跳んで避けたから通り過ぎただけなんだけどね。

『つとと…：やっぱりドラゴンと話すなんて無理か』

そのため息を吐きながら着地する。

グルルルルル…

尻尾の攻撃を避けられた事に少しだけ警戒しているのか？

まあ、どうでもいいけどな

『とりあえず、お前を倒す』

攻撃するならば手加減なんて無用、そう思いながら頭の中で作戦を構成する。

相手はドラゴン…：近距離に持ち込めば爪とかで抉られそうだな。

じゃあ、中距離か？…：ってさっき尻尾が攻撃してきたんだっとな。

…：てゆうか、遠距離だったらいんじゃないかね？遠距離攻撃法なさそうだし。

『とりあえず、遠距離射撃か』

そう呟き、両手をドラゴンに向ける。

『創造』

思い浮かべるは原作のロスト時使用していた刻の2丁拳銃。
詠唱と同時に手の平に描かれる魔法陣。
そして魔法陣から構築された物質を手に取った。

『…これが刻の銃か。意外と重いな』

2丁の銃が両手に収まった瞬間、試しに一発ドラゴンに向けて撃つ
てみる。

パンツ カキン

…やっぱり跳ね返されるか。

まあ、予想通りだからいいけど。

『む……どうしたものかねえ』

先程からドラゴンがやけに静かだ…

と思った矢先

ボンツ

ドラゴンの口から特大の炎弾が飛んできた。

あぶねええええ!!

そんな悲鳴を上げつつ、とっさに右へ跳んだ。

着地と同時に先程自分がいた場所を見ると…、

ジユウ

思いつきり地面が溶けてました

…え？怪物ですかい？

『マテマテマテマテ！！流石に死ねる！！』

危機管理能力がupした瞬間だった…うれしくねえ。

『こつなったら、さっさと決着付けるか』

目を瞑り、刻の銃に能力を付属させる

銃弾は”光”、速さは光だけで充分だが轟音をたてる訳にはいかないので”音”を使って出来るだけ消音。それと”光”の異能に耐久できる様に『磁力』も使い銃自体を強化する。

感想：何てチート銃だよ。

『んじゃあ、goodby!』

ズガン

そんな重い音が響き銃口から太く熱過ぎる程の熱量の光がドラゴン目掛けて飛んでいく。

光の銃弾は、ドラゴンの体を容易く貫いた。

…この銃強すぎね？いや、今更なんだけどさ。

グオオオオオ

なんて思ってたら、ドラゴンは俺に向かって咆哮する。それを焦らず音の衝撃波で相殺し、対処完了。

ちよ、今の咆哮放てるとか…どんだけタフっすか？

『…てか、ドラゴンの全身から血が出て…うっぷ』

そんな感じで吐きそうになってたら、ドラゴンが行き成り倒れた…。どうやら、衝撃波が最後の力だったらしいな。

『ちよ、血がドバドバで…オエツ！』

グロすぎて…思わず吐いてしまった。

てか、意識がヤバい。もうどれくらいヤバいかというと、超ヤバい。

そんなしょうもないことを考えながら、意識を失う直前俺は思った。

チート銃は禁止にしよう…。うん。絶対。

異能力の制御完結（前書き）

約9割説明文です。

6 / 1 1 修正加筆。

異能力の制御完結

ドラゴンを倒してから300年の歳月が過ぎたころ…。

『…俺変わったな』

ドラゴンを倒してから最初は生き物を殺す事に躊躇っていたのに、最近では躊躇いが無くなった…。

それが良い事なのか悪い事なのか。俺には解らない。

人道としては、悪いだろう。殺し、ダメ、絶対。的な感じで…。
だが、生きる為だとしたらいい事に入るか…？

そんな解も出ない問いに悩みつつも、まとめると生き物を狩る事に躊躇いが無くなったって事だ。

あ、そうそう…300年の間に俺の知っている限りの異能を全て習得した。

そんなこんなで、習得した『異能』『特技』『武器』を公開しよう。

【習得した異能】

『電力』『音』『磁石』『光』『影』『青い炎』『水態』『泡膜』
『灰燼』『空』『分泌』『表皮』『引火』『絶対空間』『細胞再生』

【神から異能】

『創造』『亜空間』

【特技】

銃器類の場合：案山子を創り、的にして100メートル離れた所からマグナムを打った所ド真ん中の中に的の中…その他の銃器（ショットガン、サブマシンガン、スナイパーライフルetc）を使った所案山子が穴だらけに成ったので、最後の締めくくりにミサイルランチャーを打った所50メートルに亘って浅いクレーターが出来た…正直あまりの威力に啞然として今後使わないように…と思ったのは秘密であつたりする。

刀の場合：複数創ったのだが、ある数本を創った所で止めた。ちなみに腕は超一流。

料理の場合：素材を活かした料理を得意し、腕と味とは超一流。

瞳術の場合：動物に使った所、クマさんが痙攣して口から泡を吹いて倒れた。

超音波の場合：鼻歌だけで動物達が倒れた。

【武器】

異能で出来た6本の刀：異能刀の数々。

『青い炎』を元に創った刀

名前：灼閻しゃくえん

特徴：刀身に蒼い炎を宿し、柄に燃え盛る龍の姿が刻まれている。火がある所なら何処でも取り出せる。

属性：『炎』

能力：斬ったものを全てを塵へと還す。

『水態』を元に創った刀

名前：時雨しぐれ

特徴：刀身に透き通った様に透明な水を宿す。柄に蒼い燕の姿が刻まれている。水がある所なら何処でも取り出せる。

属性：『水』『氷』

能力：斬ったもの全て凍結させる。

『電気』を元に創った刀

名前：雷切らいぎり

特徴：刀身に雷を宿す。柄には咆えるような狐の姿が刻まれている。電気が存在する所なら何処でも取り出せる。

属性：『雷』

能力：斬ったもの全てを支配する。

『空』を元に創った刀

名前：空絶くうぜつ

特徴：刀身に風を宿す。刀身に鎌を持つ鼬の姿が刻まれている。空気がある所なら何処でも取り出せる。

属性：『風』

能力：斬ったもの全ての切り刻む。

『光』を元に創った刀

名前：光陽こうやう

特徴：刀身に光を宿す。刀の柄には獅子の姿が刻まれている。光がある所なら何処でも取り出せる。

属性：『光』

能力：斬ったものが全てが粒子へと還る。

『影』を元に創った刀

名前：影夜かげよ

特徴：刀身が漆黑で影を宿す。柄には黒猫の姿が刻まれている。闇や影があるなら何処でも取り出せる。

属性：『闇』

能力：斬ったものを全てを喰らう。

ちなみにだが、刀は全て亜空間に仕舞ってある。

まあ、今回はこんな感じで紹介しかできなかったけど…まあいいか。

ふああ…じゃあな…（スピー）

異能力の制御完結（後書き）

灰燼の読み方を教えてくださったヨンドルさん…有難うございました！！

身体能力制御

前編（前書き）

6 / 1 1 修正加筆。

身体能力制御 前編

前回異能などを紹介した通り、俺は現在知っている異能力全てを覚えてた訳だが…。

暇です。超暇です。異能を使ったら基本何でも出来るし…。

朝食を食べたければ、狩りをして料理する。この際”引火”や”青い炎”マジ便利。

風呂に入りたければ、”水態”を使って体を洗えばいい。何処からでも水を用意できるしな。

睡眠を取りたいければ、”絶対空間”や”亜空間”の中に入れば、先ず襲われない。

…あれ、俺って異能に頼ってばかりじゃね？

『よし！サバイバル式で鍛えるか！』

サバイバル式とは…簡単に言うと、素手で熊さん虎さん狼さんetcな猛獣たちと闘うってことだ。この時、一切の異能を使わないことが重要。

『これって結構危ないんだがね…』

まあ、暇も潰せて身体を鍛えられるから一石二鳥でいいだろう。

そんなことを思いながら、森を散策しはじめた。

*

そんな感じで歩いていると必然的に敵さん達と出会っ訳で…。

グルルルル

俺の目の前に呻り声をあげながら近づいてくる大きな狼さん…。
とりあえず、狼を見つけた瞬間、何時でも動ける様に腰を落とす。
そして、先手必勝って事で狼目掛けて突進。

すると、狼は俺目掛けて左手を横に振りかざしてくる

『フッ』

が、その攻撃を下にしゃがむことでかわす

そして、しゃがんだ状態から前へと倒れ込むように狼の懐に入りこみ、

『千里神羅 壱ノ手』

狼の心臓部分を目掛けて掌底打ちを撃ちこむ。

パンッ

と乾いた音が響いた瞬間…狼が宙に舞った。

『千里神羅 壱ノ手』

宙に舞っている狼を追いかけ、落ちてきた狼の心臓部分目掛けて掌底打ちを再度撃ちこむ。

ドパンッ

先程より乾いた重い音がして木々目掛けて吹き飛んだ。

俺は狼が気絶していることを確認してから、一度深呼吸して呼吸を整える。

『…ふむ、意外と簡単に倒せたな』

手を握りながら呟く。一応我流の体術だけで倒せるみたいだ。

『とりあえず、この調子で次々と倒して行くか』

そう言つて、また森の中を歩き出した。

*

狼を倒してから次々と出会う敵と闘った。

俺VS虎だつたり…

俺VS大蛇だつたり…

俺VS大鳥だつたり…

俺VS大熊だつたり…

…あれ？基本的に危ない奴しか闘ってないな…まあいつか。

そんなこんなで、素手だけで猛獣相手に勝てるという…もう何て言うの？…俺化け物じゃね？って事ですよ。そう自覚したら、少し気

分がブルーになった…。

てゆうか、素手で勝てるんならもう少しハンデがあっても大丈夫か？

うん…と唸りながらハンデになる方法を考えていたら…、

『あれ使えそうだな』

ふと頭に浮かんだ物をモノ。それは確かに原作でも使っていたモノでありハンデには打ってつけなモノであった。

ふむ…よし、これに決めた！

『…クツクツク、コレでハンデになるな』

その日の夜、不気味なオーラを出しながらブツブツと呟く一人の男とそれを遠巻きに動物たちが見つめている。そんな不思議な光景が広がっていたそう…。

身体能力制御 前編（後書き）

《オリ技》

【千里神羅 壹ノ手】

生命力（気）を燃やして、身体能力を強化。

そして強化された身体全体で掌底を放つ。

ちなみに、“千里”は千里眼の意味を持つ『距離』を、“羅”は羅針盤の意味を持つ『方位』を、“神”は『神をも倒す』という意味を指すところから名づけられた。

身体能力制御

後編（前書き）

6 / 1 1 修正加筆。

身体能力制御 後編

『…意外と重いな』

昨日の夜考えた方法…、

それは

ズバリ！「やまゐる」渋谷になる事です！！（解らない人はググってくれ）。
何？鉄とか鉄とか鉄とか…主に鉄しか入ってねえんじゃね？みたい
な…。

『とりあえず…歩けるかな？』

そう言いつつ前に進もうとするが…、

『う、動かない…！？』

一歩も踏み出せませんでした

イヤイヤイヤ…待とうよ。このままじゃ猛獣に会った途端に喰われ
そうなんだけど…。

ガサガサ ピョコ

『「……………」』

目の前で眼をキラキラと輝かせている虎さん出現！

.....。

.....。

.....。

デットエンド!?

『早え! 出会うの早え!!!』

せめて、動けるまで待つてほしかった!!

そんな思いも当然ながら通じず、動けない餌オシを見て唾液をダラダラと垂らす。

しかも、見た目は巨大な猫。それも動かない...ならばどうなるか?

ジュル ハッハッハ

涎を垂らして一層鼻息が荒くなった...

ガアアア

そして、虎が俺目掛けて突進してくる。

ああ、此处で死ぬのか...

『...つて、んな訳ねえだろオオオオ!!!』

自分勝手に逆切れした俺は 自分自身最速の速さで虎目掛けて右足をフルスイングした。

バキッ

蹴りは俺目掛けて跳んできた虎の頭を的確に捕えたらしく、嫌な音を出しながら虎は木々を数本倒しぶっ飛んで行った。

ブン

そして、1拍遅れて風を切る音がする。

わぁー、音を置き去りにしちゃった Z E !

…今の俺って人間かな？果てしなく疑問なんだけど…。てゆうか、着ぐるみが重い分蹴りの威力が絶対増してる。蹴りはパUNCHの三倍って言うけど…軽く十倍はある気がする。

『…とゆうか今蹴り出来たらか歩けるよな』

少しだけテンションが上がってたのでいざ一歩…！

『……………』

何故歩けない…!？

あれか？さっきのは火事場の馬鹿力的な奴だったのか…!!？

そんな事実気づいたら瞬間、俺はズーンという効果音が似合いそうな程落ち込むのであった…。

*

猛獣^{ウツク}を倒して5時間たった現在

『はあ…はあ…つく！』

どうにかブリキ人形みたく片足ずつ動けるようになった。

しかしこれは想像以上に疲れる！！てか、死ぬ！！

『…いったん休憩するか』

とりあえずその場に座り、空気を換気するために頭の部分だけ着ぐるみを外す。

一瞬頭から熱気が出たりしたので、近くの川にダイブ！水は良く冷えていたので頭の熱気を冷ましてくれた。ついでに、水分補給と水風呂しとこつと…。

そう思いながらずっと着ていた着ぐるみを脱ぐ。

朝から着ぐるみの中にいたせいか、着ぐるみの中は熱気が凄かった。ついでに、着ぐるみも冷やしておこう。

というか、歩く事を練習し始めてよく猛獣達が出てこなかったな。いや、助かったからいいんだけどさ。

それにしても、と呟く。

『着ぐるみ^{コレ}を着て軽々と大神と刻相手に戦ってた渋谷会長って一体

…』

初めて渋谷^{じやごほ}会長に尊敬の念を抱いたよ…。

そう思いながら着ぐるみを着て立ち上がり一歩また一歩と歩く練習を始めた…。

*

歩く練習を再開して10時間経過した現在

『フツ！…はあはあ』

練習を再開してから3時間後、歩く事に対して余り疲れなくなった。だから歩く事からレベルアップして今は走っている。

…だが、コレが予想以上に体力の消費が激しい。

先程本気でダッシュをした所 10メートルで死にかけました…
テへ

あ…今テへ って言った自分に対して寒気がした。

『…でも、ちょっと涼しくなったかも』

どんな涼み方だ！ってツツコミは聞こえない。

そんなことを思いつつ、走るスピードをあげてみると…

『死ぬ…！てか汗が拭けねえ…！』

一気に足が重くなり着ぐるみの中で汗が止まらなくなった…。

何より着ぐるみの中が暑い！！冷やした意味がなくなった！！

ん？何を今更…？これを言っとかないとストレス溜まりまくりなんで…言わざる得ないですよ！

『…ああ、水が欲しい』

切実な願いですね。わかります。

『…ん？』

ブツブツと言いながら走るスピードを緩めた時…、

ガッ

木の蔦ツタに足を取られた。

ゴロロロロ

そして、そのままボール見たく転がっていった先が

『なんで崖なんだよ！！』

道先が途切れている崖っぷちでした。

しかも、転んだままスピードが衰えるどころか更にスピードが増すという…。

『ああ…次こそ死ぬ』

ポン

と軽い音がして…

『うわあああああ！！』

崖から落ちたのであった…。

『…なんて事は無いけどさッ!』

崖から落ちて地面に着地する直前

『バブルパッケージ
泡膜守護』

口から人一人包み込むような薄く巨大な膜が出て水面に浮かぶ。そして、その上から俺が押し掛かり、膜が反発する力で地面へと降り立った…。

『…日和ひよりの業わざって結構応用利くからいいんだよな』

そう呟いて水面に浮いてい巨大な膜を見て指をパチンと鳴らす。すると、パンツと破裂する音がして泡膜が消えた。

『はてさて…これから如何いかにするかな』

そう言って晴れている空を見上げて呟くのであった。

身体能力制御 後編（後書き）

本作で出ていなかったなので説明…にやんまろ渋谷会長の着ぐるみは創造で作りました。

最後の方、翔が指を鳴らすだけで泡膜を破裂させたのは『音』を使った衝撃波のおかげです。

始祖の子供達 (前書き)

なんか無駄に長いです。

6 / 1 1 修正加筆。

始祖の子供達

神のお告げは突如やってきた

『…はあ?』

「はあ?じゃなくて!そっちの世界に数人創るから見つけて育てて」

…この創造神は何を言ってるのだろう。

「だから…って馬鹿にされた!？」

『そんなことより、話は解るが急過ぎるだろ!？』

体術の修行をしようとしている時に突如俺の頭に声が届いたのだ…。

そして、内容は

「人間を数人創るから、見つけて育てろ」

そんな感じの言葉。

…うん、百歩譲って育てるはいいよ…これは受け取ってやるう。

『だが、見つけるってなんだ!？見つけるって!…!』

少しキレ気味　ゴメン、かなり切れてます。

「うう…だって纏めて創っても面白くない…ゴホン。纏めて創るの
苦手だし」

…おい、逃げれてねえよ。せめて前の方を隠そうや！

「…ゴホン。んじゃあそう言う訳だから今からスタートね？」

……。

……。

……。

はい？今何て言った？

『…何時からだって？』

「ん？今からスタート。既に4人の子供を創ってる…あ、ちなみに
だけど覚醒してないよ？」

ん…とりあえず解った事が1つ。

『てめえ、ちよっと面貸せや』

コイツヲ殴る事だと。

「ちょ！神様殴るって何事のら!？」

口調戻りやがった…よし殴ろう！

「結局殴るのら!?!?てゆうか、殴らせないのらよ!?!?」

…詰まらん、実に詰まらん。

「何故だろう…この私が悪い様に扱われている気が…」

扱っては無いだろ…馬鹿にしてるけど。

「その事だよねえ！？と言うか、早く4人の子供を助けないと魔獣達に襲われちゃうよ？」

『ん…助けに行くけど、その前に3つだけ』

「手短にしないと死んじゃうよ？」

『解ってる。1つ目、子供達が覚醒するとは何だ？』

「覚醒とは、その名の通り血による覚醒…言い方を変えれば能力の覚醒だよ」

『質問2つ目、4人の子供達の種族と能力を教える』

「言葉使い荒いねえ…まあいいけどさ。種族を言うと『人間族』

『魔族』『獣人族』『妖精族』の4つ。能力は種族によって変わるからお楽しみで…子供達の能力を知らなくても翔君はどうせ対処できそうだしね」

対処できるかどうかは知らんぞ？死なない様にはするけど。

『最後3つ目、子供達を育てている間に新たな人間が創られるのか？』

「うん。だから子供達が死なない程度に力を付けてあげてほしいの
ら」

『了解した…ただし条件があるぜ？』

俺も親切でやる訳が無いだろ？貸しを作るならそれなりの事を…ね。

「いいよ…条件は？」

『コードブレイカ の新しく出てきた異能をくれ…それだけだ』

新しい業はあつて困らないからな…。

「了解…じゃあ、あとはよろしくね」

そう言つて念波が切れた

『…スーツは脱いでおこつ』

久しぶりにスーツを脱いで子供たちを探しに行くのだった

*

「クソツ…！」

一人の少年が悪態をつきながら逃げ回る。それは何故か。
答えは単純明快。少年が襲われているからだ。

キエエエエエ！

少年は奇声を上げながら自分を追ってくる化け物を見て心の中で悲鳴を上げる。

俺が何をした!!

ただ森の中を彷徨っている俺が…お前に何をしたってんだよ!!

「うあ!?!」

涙が出そうになり目を瞑った事で目の前の段差に足を取られゴロゴロと転ぶ。

キエエエエエエ!!

奇声を上げながら迫ってくる化け物に死の恐怖を感じ、足腰が震えて逃げれなくなった。

「う、うわあああああ!!」

自分のすぐ近くまで飛んでくる化け物を見て思わず目を瞑った。

…俺は死ぬのか。

そう思った瞬間、

パンツパンツ

乾いた音が響き、直ぐにドサツと何かが落ちる音がした…。

「……………」

いつまでも来ない衝撃に恐る恐る目を開けると目の前に化け物が頭から血を流して倒れていた…。

「…え？」

余りの出来事に擦れた声しか出てこない。

『お〜い…少年大丈夫か？』

右側から声がしたのでゆつくりと顔を動かす

『おい…大丈夫か？』

そこに居たのは不思議な格好と武器を手にしている黒髪黒眼の男だった。

*

『おい…何処にいったよ…』

子供たちを探す事…1時間。

ちなみに、子供の『こ』の文字すら浮かばない現状。

『…しゃあない、探知やってみるか』

探知 極限まで集中し、第六感を鋭くする。鋭くなった第六感で周りの気配を感じるのだ。

目を瞑り、極限まで集中する…周りは黒く塗りつぶされ自分の周りには何も無い。

『気配探知 開始』

眩いた瞬間に、俺を中心として四方から火の玉が見えた…。

前方… 500メートル先に光沢を輝かせている人玉

右方… 500メートル先に虹色に光っている人玉

左方… 500メートル先に黒く蠢いている人玉

後方… 500メートル先に半透明で止まっている人玉

…なんで500メートルずつなんだ。

ふと言葉を漏らしたが、直ぐに切り替える。

『とりあえず…前方から時計回りに回収するか』

そう呟いてから足に力を溜め

『フツ!!』

溜めた力を爆発させ1瞬で200メートルの距離を短縮し、力強くもう1歩を踏みだす事で更に200メートルの距離を短縮させた。所謂”縮地”と呼ばれる技だ。

『ふむ…なんか襲われてるな…』

100メートル先に1人の少年と少年の後ろから30メートルぐらい間を開け追いかけている翼が生えた化け物を発見した。

『創造』

いつぞやの刻の銃（改良前）が両手に展開される魔法陣から現れる。しかし、前回とは違い、創り上げるときに付属効果として”射撃の安定”を付ける。これは射撃するときは一切のブレを無くすというモノだ。ちなみに撃った後の反動も無くす。

『逝ってこい』

目を瞑って悲鳴を上げている少年に襲いかかるうとしている化け物の頭を標的に定め撃つ。

パンツパンツ

銃声の乾いた音が鳴り響くと同時に化け物が地面へと落ちた。どうやら命中したらしい。

少年は化け物が襲ってこない事を不思議に思ったのか、ゆっくりと顔を上げる。

俺は少年までの距離を一気に縮め、少年の横へと近づいた。

「…え？」

少年の擦れた声が聞こえる。

『おゝい…少年大丈夫か?』

呆けている少年に声をかける…。
すると少年は俺の方へゆっくりと顔を動かし俺の顔を凝視した。

…何?どうかしたか?

『おい…大丈夫か?』

呆けている少年へと声を再度かける。

俺を見てパクパクと口を動かして何言いたそうな表情をする。
しかし、俺は子供達を回収するという使命があるので、さっさと少年を左肩に担ぐ。

「は、離せ!」

突如担がれたことで暴れる少年顔面に拳銃を当て

『喋ったら殺すぞ?君以外にも子供はいるんでね』

殺気の籠った笑顔で言い放つ。

「あ…」

殺気を向けられた少年は体が硬直させる。

『従つ子は好きだぜ?』

そう言いつつも『落ちるなよ?』と忠告してから次の子供を見つけ

る為に走り出す事した。

*

最初の子供を助けてから順調に子供を見つけ出し救出した。

ちなみに、1人目の少年は翼が生えた人間っぽい化け物に襲われていたので、まさか他の子も化け物に？と思い走るスピードを上げた結果、

2人目の少女は、巨大な蜘蛛に食われそうに…それに気付いた俺は蜘蛛の胴体を狙い銃弾を連発し蜘蛛を銃殺。

3人目の少年は、巨大なマンモスの奴（以下マンモス）に踏みつぶされそうになっていた所を発見…少年を先に助け、銃をマンモスの目へと向け射撃。両方の視力を失ったマンモスは何処かへ去っていった。

4人目の少女は、巨大な石像から逃げていた所に俺と子供たちが見つけ、回収した。

まあ要するに全員化け物から無事に生還したのである。

で、回収を完了した俺達とは言つと…、

『…スピード速いな石像のくせに』

4人目の少女を追いかけていた石像から逃げ回っています。

ちなみに、先程から会話が無い子供たちと言つと…、

「「「「……………」」」」

俺の肩に抱えられた状態で無言を通していた…。

初めは全員俺に抗議をしようとしたみただけ、近くの木を射撃対象にし射撃。

刹那、蜂の巣になった木を凝視していた子供たちに一言…、

『これを喰らって死にたくなかったら今は黙れ』

純粋な笑顔で言い放つと全員が黙りこんだ…やっぱり子供は素直が一番だな、うん。

『ん〜…これじゃあ鬼ごっこだな』

背後にいる石像の気配を感じながらポツリと呟く。

「…あ、あの」

1人の少女が消え入りそうな声で俺に声をかけてきた…ちなみに子供達全員が声をかけた少女をガン見してる。

…君たち、怖がってるからやめなさい。

『どっした？』

俺は少女の顔を見ずに声をかける。

「に、逃げるんですたら…先程洞窟がありましたので、そこへ逃げた方がいいのではと…』

…洞窟？マジで？

『…それは何処にあつた？』

今度は肩に担がれている少女の顔を見て言う。

「ひあ！？」

肩に担がれているので必然的に顔が近くなる。まあ、突然顔が近づいたらビツクリするわな。

『脅かして悪い…んで、洞窟は何処だ？』

一度謝罪をしてから少女へ先を促す。

「あ、はい…私から見て右側です…」

それは俺から見ても同じなんだが…まあいいや。

『右だな？よし、捕まっとけ』

そう一言入れてから脚に力を溜め、溜めた力を爆発させ

『…高過ぎた』

「「「イヤアアアア！」「」「」

上空へと跳んだ。

『あ…悪い？』

「」「」謝る気0!?!?」「」

うん。全く謝る気ない。

『とりあえず…洞窟へ入るか』

そう呟いてから子供たちへ一言…、

『歯…食いしばつとけよ?』

「」「」歯…?」「」

『んじゃあGO』

緩やかな口調と反対に俺の背中目掛けて突風が襲いかかってきた

「」「」イヤアアア!」「」

『おお』

4人の子供達は悲鳴を1人の男は愉快そうな声を上げながら吸い込まれるように洞窟へと入っていった…。

『あ…大丈夫か?』

「」「」全然大丈夫じゃねえ(ない!!)」「」

『…悪い』

突風が俺の背中に襲いかかり洞窟へと吸い込まれていった時に『あ、ブレーキないと死ぬな』と思い立った時には直ぐそこまで地面が迫ってたため『しゃあない…荒いが勘弁してくれ！』ゲロる寸前の子供達に一声かけ、異能の『空』を使い空気を圧縮させ創りあげたクツションで地面へと降り立った…。

ちなみにだが、クツションブレーキを使っても10メートル地面を抉りながら進んだ…自然の風は脅威だと再確認した。

『グロッキーな所悪いんだが、自己紹介をさせてくれ』

「グロッキーにさせたのは『あん？』…なんでもないです…ゴメンナサイ」

少し、しつこかったので1割の殺気を喋った少年に放ち黙らせる。

『俺の名前は、一ノ瀬 翔。翔の方が名前だ』

そこでいったん区切って子供達を見る。

『今日は色々の事があって少し混乱しているかもしれない。それに君達は俺に幾つか質問したいと思ってるんだろ？』

そう言うと全員コクリと頷く。

『質問は後にして…今は状況と君達の情報が欲しいんだ。だから1人ずつ自己紹介をしてくれ』

近くに居た少年に自己紹介をするように先を促す。

「あ、ああ…俺の名前は、レイン・アルヴェアだ。レインと呼んでくれ」

わんぱく少年…レインの容姿をご紹介。

金髪金眼で前髪は目に少し被さる程度で身長は160前後。体型は、可もなく不可も無く…要するに普通である。

服装は、健康的な肌色とは対照的な白銀の色を基調とした服と装備。ちなみに現在装備されているのが、装備は身を守るための最小限の胸当てだけだった。

『よろしくな』

「あ、ああ…よろしく」

そう言ってレインと握手をする。

視線でレインの隣にいた少女を見て先を促す。

「あら、次はわたくしですの？…私の名前は、エルファ・ルーシェン。エルファとお呼びくださいませ」

お嬢風少女…エルファのご紹介。

銀髪青眼で髪はロングストレート。後ろ髪の長さは腰に届く1歩手前ぐらい。

身長は、160前ぐらいで、体型は、ほっそりしとじていて華奢な感じ。

服装は、白色を基調としているワンピース。肌の色は雪の様に白い。

『よろしく』

「よろしくですわ」

そう言っつて握手を交す。

「…次は俺だな。俺の名前、ギル・オーレン…是非貴方様に戦いの講師をお願いしたい」

将来戦闘狂になりそうな少年…ギルをご紹介。

黒髪紅眼で前髪は少し眼に掛かる程度。

身長160前後で、体型は脂肪が無さそうで引き締まっている感じ。服装は、全て黒色1色で統一された長袖長ズボンと胸当て。肌の色は少し黒い。

『講師は後でしてやる』

「それはありがたいです」

そんな言葉を交しつつ握手を済ます。

『んで…最後に君だね』

全員が最後の少女をみる。

「ひゃい…!」

『…大丈夫か？』

深呼吸をしてみる。そう言うと少女が数回深呼吸を繰り返し、もう大丈夫ですと言ったので後は任せた。

「私の名前は、リンス・ルベリアです。先程は見苦しい所をお見せしてすみませんでした…」

そうやって謝罪の言葉を添えて頭を下げてきたリンスをご紹介。

灰髪緑眼で髪はショートカット。後ろ髪は肩に掛かる程度。身長は150前後で、体型はほっそりしていて華奢だが、運動は出来る方だと推測する。

服装は、動きやすさを重視している灰色のTシャツ半ズボン。肌は健康的な肌色。

『よし。自己紹介は終わりだな…』

そう言うやいな、エルファが手を挙げた。

『ん？なんだ？』

「質問がいくつかありまして答えていただきたいですの」

ん…質問か。まあいいけどさ

『いいぞ』

笑顔で許可をする。

「ええ…では、1つ目」

side エルファ

「ええ…では、1つ目」

私の目の前に居る男へと疑問を投げかける

「貴方は何者ですか？」

私を襲っていた巨大な蜘蛛を軽々と殺し尚且つ子供4人の救出。普通の人でしたら困難な事を軽々とやってのける目の前の男…何者なんでしょうか。

「何者…ねえ」

少し困惑しながら言葉を選んでいる男…

「そうだな…ただの人間だ」

「そんなわけありませんわ！あれだけの化け物じみた生き物を軽々と殺せる貴方が普通の人間な訳ありませんわ！！」

激怒した様に男を問い詰める。しかし、男は少し困った表情で言うてきた。

『んにゃ…どれだけ弱くても技術をもってすりゃあ誰でも殺せるぞ』

「確かに…」

男に同調するかのようにはしゃぐ黒髪紅眼の少年　ギル。

「貴方はどっちに付いておりますの!？」

「俺はこの人についてるよ…とりあえず落ち着いたら?」

『おお…なんか良く解らんが好かれてるな』

少し面白そうに微笑んだ男に対して問いかける。

「はあ…で、本当の所貴方は何者ですか?」

『…知りたいか?』

少し真剣な表情に1瞬ビクッと体をこわばらせる。

「は、はい…知りたいですの」

『俺はな…』

ゴクリと子供全員の喉から音が聞こえてくる。

『俺は……秘密だ』

ズルッと一斉に転ぶ子供たち。

「ひ、秘密ですよ!？」

『お前等コンビネーションばっちりだな』

ケラケラと笑いながら『はい。次の質問は？』と流された。

「次は俺だ」

手を挙げて発言する レイン。

「アンタは『翔だ』…翔は何故俺達を助けた？」

なるほど…これは結構重要ですね。

『選ばれたから』

「」「」「選ばれた…？」「」「」

全員の声が重なる。

『そう…お前等は創造神バカに選ばれたんだよ』

「今、神の事をバカと読みませんでした？」

『気の性だろ』

肩をすくめる男に問う。

「私達を選ばれたとは…どついう事ですか？」

『ん…平たく言えば、レイン』

そう言って、レインを見据える。

『お前の種族は人間だろ？』

「え？あ、ああ…その通りだ」

『ギル…お前は魔人だろ？』

「ええ…その通りです」

『リンスは獣人で、エルファは妖精だろ？』

「は、はい…その通りですけど」

「ええ…それがどうかしまして？」

次々と種族を言われる事に疑問を持ちながらも問いかける。

『レインは人間族第一号。ギルは魔族第一号。リンスは獣人族第一号。エルファは妖精族第一号ってな感じで、お前等が一番初めに出来た種族だ』

「………」

あまりの事実に、驚愕しているわたくし達。

「じ、じゃあ…私達以外に人はいないんですか？」

リンスが男へと疑問を投げかける。

『その通りだ…まあ、直に出来るだろ』

「確証はあるのですか？」

『なかつたら言わん』

「その確信できるものとやらは何だ？」

『創造神が言った』

「「「「はい？」「」「」

創造神ってわたくしたちを創り上げた神様ですよねえ…？

『…まあ、創造神の事は明日話す。他に質問はあるか？』

はあ…今は聴くなと仰りたいのですね？

「わたくしは無いですわ…」

「右に同じく」

「私も無いです…」

「俺も無いぜ」

『よし…んじゃあ、今日はもう遅いから寝てくれ』

「…何処で寝ると仰りたいのです？」

周りを見ると、ゴツゴツとした岩ばかりだった。

『…他の奴らも同じか?』

「俺は大丈夫ですよ…」

「俺もいけない事は無いな」

「わ、私もいけますよ」

「」「」

な、なんですか? わたくしがいきませんの!?

『クッククク…良いよ。エルは俺の所において』

エル…ってわたくしですか!?

「な、なんですか?」

気丈ぶって男へ近づく。

『そんな警戒すんなよ』

男は苦笑しながら私を見る。

「け、警戒などして キヤア!」

言葉は最後まで続かず、男がわたくしの手を引いて自分の懐へと私を納めた。

「な、ななななにしていますの!？」

『え? いや…眠れねえんだろ?』

「こ、こちらの方が眠れませんわ!！」

『警沢言っつなつての…!』

そう言っつて、わたくしの腰に右手を回し左手でうなじに手を掛け、私の顔を自分の顔に近づける。

「ッ!？」

鼻と鼻が交わり吐息が分るぐらいの距離になったとき、男はこちらを見て微笑んでくる…不覚にもドキリとしてみました。

「…私達は空気ですか」

「てか、手出すの早いな」

「…寝よ」

3人それぞれの言葉をかけてくる。

『……………』

ふと男の周りの空気が変わった。

「ど、どうかしましたの?」

突然雰囲気が変わった事に驚き質問する。

『…なんでもないさ』

直ぐに元の雰囲気になり『そろそろ寝ようか』と言って各自まとま
って寝る様に促した。

あの雰囲気何かあったのでしょうか？

これ以上は頭で考えても仕方が無いと頭の隅に追いやる事にした。

side 翔

『…よし』

子供達が全員寝ている事を確認して、洞窟を出る。

それにしても、昼の石像がまだいるとはな。

石像の気配は直ぐ近くにある。早くし止めなければ後でめんどくさ
い事になるだろう。

『さて…行くか』

「何処に…ですか？」

…まさかと思い、後ろを振り向くと

「私を置いていくなど百年早いですわよ？」

お譲なエルがいた。

『お前何してんの?』

「貴方こそ何していますの?」

『トイレだ』

「嘘をつくならもっとマシな嘘をつきなさい」

…めんどくせえ

『ふう…一応聞いておくが、何でついてきた?』

「貴方の雰囲気が変わったからですわ」

鋭い勘をお持ちで…ここでは要らなかつたけどね。

『それで…?ついてくる気か?』

半ばあきらめモードに入っている俺。

「もちろんですわ!貴方『いい加減名前呼べよ』…翔の秘密が知りたいのです!」

秘密って言っても…あるな。異能とか異能とか異能とか。

『まあいいけど…ほら』

どうせ洞窟へ帰しても仲間を従えて俺の所へ来る筈だからな。今は
最小限で済ませたい。

「なんですか？この手は…」

『この手を取ったら、スタートだ。帰るのなら今のうちだぞ？』

ニヤリと笑うと、エルも不敵に笑って手に取った。

「私が怖気づくとも？」

『クックック…さて、行くか』

「ええ…」

お互いの顔を見て頷き深い夜の森へと歩き出した…。

龍族との出会い (前書き)

6 / 1 1 修正加筆。

龍族との出会い

『おいおい……』

「……ありえせんわ」

石像のいる場所であろう場所に広がっていた光景

グルルルルル

グシヤ ガラララ

いつぞや闘った紅いドラゴンそじくりさん様が石像を壊していた。

何？この光景……。

「ち、ちよつと翔……？どういう事ですか？」

いや、しらねえよ……てか、俺が聞きたい。

『そんな事より……何故ドラゴンが石像を壊してるだ？』

グルルルルル

動く石像を造作も無く潰し

ウオオオオオオ

空へと咆哮するドラゴン

…うん、逃げようか。

『おい、エル。ここから』

逃げるぞ。と言おうとした時…、

パキッ

エルが近くにあった小枝を踏んでくれたね…ちくしょう！

当然ながら小枝の割れる音は静かな夜に良く響き…。

グルルルル

ドラゴン様がこちらを振り向いてくれましたよ。

『…エル』

「…す、すみませんですわ」

はあ…深いため息をドラゴンの前へと現れる。

「ち、ちよつと!?!」

後ろで何か言っているエルに”お前は来るな”と伝えておく…多分
素直に従ってくれるだろう。

『さて…どうしたもんかねえ』

そう呟きながら、ドラゴンと対峙する

てか、本当にどうしよう。

やべえ、全く対策考えてなかったわ…。

なんて、内心打開策を練っていた時

《オヌシ、ワレノテキカ…?》

よく頭に響くカタコトの言葉。

…気の性か?こんな危険な場面なのに。

ふと自分の頭がおかしくなったか?と思っていると…。

《モウイチドキコウ…オヌシ、ハワレノテキカ?》

2度目…そして、先程より少し語り掛けられる様な感じがする。

ふと目の前のドラゴンをみる。

『……………』

ジッと互いを見つめる。

『…お前か?語りかけているのは』

と言つか、コイツしかいないと思うね。今更だけど。

《イマサラカ…マアヨイ。モンドイハ、オヌシガワレノテキカドウ

カダ…》

『味方だとしたら？』

《ナニモセン…ダガ、テキダトイウナラバ　コロス》

最後は特大の殺気を飛ばしながら言ってきた…後ろで、エルの小さな悲鳴が聞こえたような気がする。

『…お前、只の人間が最強種のドラゴンに勝てると思ってんのか？』

呆れた声色で言うと、ドラゴンも呆れたように口にした。

《ワレノサツキヲシヨウメンカラウケテ、ヘイゼントシテイラレル
ノハ、タダノニンゲンデハナイトオモウガ？》

…言葉が長い分カタコトがウザくなってくる。てか、ハッキリ言うて聞き取り辛いからね？

『創造』

両手に魔法陣が展開され、現れたのは思い描いた通りの言語を翻訳する飲み物　”翻訳ポーション”だった。見た目は、澄んだ青色で試験管に少量入っている液体だ。

『これ飲め』

ドラゴンの口元に近づきながら言うと、警戒する雰囲気が発せられる。

《ソレハナンダ…？ドクブツハワレニキカンゾ？》

『誰が毒物創るか…言葉を翻訳する飲み物だよ。お前の言ってる事聴き取りづらい』

ドラゴンの口を片腕で上に開け、トクトクとドラゴンの口元に注ぐ。少し後に、ゴクリと音がしたので素直に飲み込んだのだろう。

『話してみる』

《…これでよいか？》

おおー！！上出来じゃね？

…今更だが、創造だけで十分チートだな。うん。

『…ところで、話しやすくなった？』

《そうだな…かなり良い》

ドラゴンにも効くのか…今度幾つか創ってみるかな？

『所で聞きたかったんだが…お前、なんで石像襲ってたの？』

なんか、理由あんのかなあ？

例えば、眠ってたのに石像が音を出してたから壊した…みたいな？

まあ、んなわけない

《ん？我が気持ちよく眠っていたのを石像が音を出し睡眠を邪魔し

ただ…だから壊した》

って思ってたら合ってたよ…え？てか、理由簡単過ぎない？

《全く…龍族を纏めるのに何日徹夜したとおもっているのだ》

…ん？龍族？？

『ちよつといいか？…龍族って何？』

《龍族は、我ら…炎龍・水龍・風龍・地龍。そして我達の1つ上には、氷龍と雷龍。最上位には、黒龍と白龍がいる…知らぬのか？》

…おおう、種族多いな。まあ、全部覚えたから良いけど。

『…てことは、お前は一番下か？』

《うむ…まあ、炎龍の中で長をしおるがの》

…長？マジで？

『へえ…じゃあ、俺は今』

炎龍の長と対等に話てんの？

《うむ…思っておる事は合っていると思う…まあ、攻撃はせんよ》

カッカカと豪快に笑う炎龍の長。

『一応聞くけど、なんで？』

《私の殺気を軽々と受け流す力量…我を含む下位の龍族では到底勝てんだろう》

流石炎龍族の長とだけあって自分の力量と俺の力量を良く解ってるな。

『ん〜…じゃあ、俺達帰っていいか？』

《うむ…我もそろそろ眠いから帰るとする》

そう言っつて、炎龍の長は翼をバサツと広げる。

『また会おうぜ…炎龍族の長さん？』

《カツカツカ…ああ、また会おう》

最後に会う事を約束し、互いの帰る所へ帰っていった…。

『ふぁ…帰って寝よう』

「わたくしをお忘れになって…？」

額に青筋を立てているエル…ゴメン、忘れてた…。

『ま、まあ…話せばわかる』

そう言いつつも、後ろへと後退する。

「…ええ、先程の龍と会話をタップリとお伺いしますわ」

『…ええ、もちろんですよ』

にこやかに言ってる…。

『帰ったらね!!』

「待ちなさい!!」

洞窟へ向けてダッシュする2人の姿があったとき…。

俺とネオと子供達 (前書き)

30000PV突破!!

なんだ？幻覚か…！？

6/11 修正加筆。

俺とネオと子供達

ドラゴンと会話をした翌日…。

『ふあ〜…』

欠伸をしながら、ノソリと起きる。

『…飯作らねえと』

俺は食わなくてもいいが子供達は食わないと成長しねえからな。

『ん〜…朝は軽くスープとかで良いかな？』

とりあえず…食材探すか。

思い立ったと同時に子供達を助けた時に使った2丁の拳銃を亜空間から取り出して、狩りへと出撃した。

狩りが終わって洞窟へと帰還すると1人の少年　ギルが起きていた。

『ん？起きるの早いな…』

今の時刻は6時くらいだ…時計ないから知らんけど。

「ええ…目覚めてしまいました」

そうか…と苦笑しながらギルを呼ぶ。

『ギル…お前料理できるか？』

「え？料理は…できない…です」

『あ……そっか』

そう言うとギルがすみませんと謝ってきた。

『いや…怒ってないからな？そうだ！ギル…お前料理してみないか？』

「…え？俺が…ですか？」

お前以外誰がいるんだよと心の中で苦笑しながら、そうだと答える。

「俺が出来ますかね…？」

『さあ？でもやってみる価値はあるだろ』

笑顔で言うと、「そうですね」と苦笑しながら返された。

『創造』

唱えると目の前に魔法陣が展開され底が深い鍋が出現する。所謂中華鍋だ。

「！？」

『ああ…これ俺の能力だから』

そう説明して深皿を数枚、木製のスプーンを数個、おたまを1つ、包丁を2つ創りだす。

「…すごいです」

『ありがとな』

ギルが褒めてくれたので感謝の言葉を述べる。

『ん〜よし』

亜空間からポトポトと地面に落ちる食材達。ちなみに、先程狩ってきた食材だから超新鮮。

「…これも能力で？」

『もちろん』

おお…！と驚かれた。そんなに珍しいのかね？

『そんな事より…ほれ』

1本の包丁を差し出す。

「え？なんですか…？」

『俺を見本として捌いてみな』

そう言って、野菜やら魚やら肉やらを切っていく。

ふむふむと唸ったギルをみると…、

ポイツ（野菜を上へと投げる音

シュパパパパ（空中で野菜を捌く音

トサツ（落ちてきた野菜を手で受け止める音

…お前何者ですか？

「どうですか？」

『ギル…泣いていいかい？』

自分より捌くのがうまそうだし…自信喪失するわ。

「え？え？」

俺が本当に泣きそうになったらオロオロし始めた…ギルは面白いな。

『まあいいや…んじゃあ、鍋の中入れてって』

「は、はい…」

突然泣きそうになったりケロッしたりと俺の変化に少し困惑しながらも切った野菜を鍋の中へと投入してゆく。

鍋の中にある具材がいい感じに煮込まれた時、寝ていた子供達が起床。

「良い匂いです」

「飯か…?」

「…いい香りですわ」

三者それぞれの感想を言いつつ鍋によってくる。

『おはよう』

「おはよう」

「おはようございます」

「おはようございますですわ」

「おはよう」

それぞれ挨拶を交し全員に野菜スープが入った皿とスプーンを配り全員が地面に座った。

「んじゃあ、食b」待て』：なんだよ？」

『全員手を合わせる』

全員が疑問に思いつつ両手を合わせるのを確認して日本人なら重要な言葉を紡ぐ。

『いただきます…これと言った奴から食べていいぞ』

「いただきます…とはなんですか？」

『自然の恵み感謝し、料理を作った人に感謝する…食べ終わる時は、ごちそうさまって言うんだ』

「なるほど…いただきます」

「い、いただきます」

「…いただきます」

「いただきます」

『いただきます…よしどんどん食べ』

食事中は料理を食べながら談話して終了した。

『ごちそうさま…ん？どうした？』

食事が終わると全員が俺をジッと見てくる。

「あの…昨日言っていた創造神様の事なんですが…」

おずおずと言ってくるリンス。

…創造神あいつに様は付けなくてもいいんじゃないか？

《ひどいのら！翔君をそんな子に育てた覚えはありません！！》

『ん…創造神あいつの事が…簡単にいえば駄目な奴だな』

《スルー！？そして紹介が酷い！！》

『…づるせえ』

「「「「「！！？」「」「」

《ちょっと翔君…殺気が漏れて子供達が怯えてるのら…》

『ん？ああ…悪い』

「え…あの、こちらこそすみません…」

なんかリンスが謝ってきた…俺が悪いんで謝られたら何とも言えない。

『（ネオ…お前子供達に声かけれるか？）』

《驚くほどの情報把握能力と対応力のら…当然できるのらよ？》

『（そりゃどうも…んじゃあ、全員に話しかける）』

《ええ…テストス…皆さん聴こえますか？》

「「「「「！？」」「」」

『あ…全員に聴こえてると思うけど、その声が創造神だ』

「「「「「え？」「」」」

うん…解らんでもないが、とりあえず「え？何？頭痛い人だったの？」的な目線で俺を見るな。

《どうも…！翔君からご紹介預かりました…創造神のネオです》

「え？あ、ど、どうも…（そ、創造神様！？）」

「ど、どうもですわ…（あ、怪しいですわ！）」

「えっと…どうも…？（創造神？ホントかよ）」

「…どうも（どうでもいい…）」

《うん…最後の子…どうでもいいって酷いよね。泣いちゃうよっ》

「「「ギル!?!?」「」」

「…ん?」

『ギル…ナイスだ!』

「…どうもです(師匠に褒められた…!)」

《私より翔君の方が位が上!?!?》

「「「ギル!?!?」「」」

全く賑やかな奴らだな…。

『どうでもいいが…俺とお前の繋がりを言ってくれ』

説明終わらせて、こいつ等にやらせたいことあんだよね…。

《ん…私は創造神で、翔君が元人間かな?》

『今でも人間だったっつの…』

《あははは…ゴメンゴメン…んつと、そうだなあ、簡単に言つと

死んだ人間を生き返らせた創造神と死んで異世界へと飛ばされた最強の人間だね》

まあ、間違っではないが…最強ではないだろ。異能全部手に入れ

てないし。

「その創造神様がネオ様で、異世界へ飛ばされた人間が……」
そう言いつつジツと見つめてくるリンス。

『ん？お前等の思っている通り俺だ』

「「「「なるほど納得」「「「」

何に対して納得してんだよ……。

『まあ、俺とネオの関係は解つたろ？ネオ……お前帰れ』

「「「《神様をそんな扱い！？》」「「」

「……帰れ」

「「「《ギル（きみ）も！？》」「「」

『ギル……ナイス！』

「……どうもです」

「「「《最悪のコンビだ！！》」「「」

『はいはい……んじゃあ、ネオは帰って……俺達はする事あるから』

「……する事……？」

《あゝ…うん、何するか解ったけど…なるべく優しくしてあげてね？》

ネオは俺の心の中が読めるので何するか解ったようだ。

『ん…それはこいつ等次第だな…』

ニヤリと笑う。

「…何故か嫌な予感がしますわ」

「そ、そうですね…私も思っていました」

「し、翔の顔が怖いぞ」

「……ワクワク」

「」「ギルよ！何故ワクワクしている！？」「」

流石、未来戦闘狂になりそうな子供第一位…。

『んじゃあ、今からやる事発表します…』

そう言って、全員に向かって

能力の覚醒をもらうから。

満面の笑みで伝えた。

俺とネオと子供達 (後書き)

ギルが翔の信者になった様です…。

能力の説明

俺が笑顔で覚醒の事を告げた。

「……」

子供達は、完全に呆けている。

『おい…大丈夫か？』

少し呆れながら聴く。

「え？いや…え？」

『ん…？何か変な事言ったか？』

頭の中で変な事を言ったか？と探す…うん。ないな。

「…師匠」

『師匠になった覚えはないが…どうした？』

ギルが律儀に手を挙げてくる。

「覚醒とは…？」

『説明してなかったか？』

「……もちろん」

…説明めんどくせえ。

『カクカクシカジカウマウマだ』

「いや…わかんねえだろ」

「」「なるほど…」「」

「あれ！？俺だけ！？解らないの俺だけか！！？」

どうやら、レインだけ伝わらなかったようだ。

『あとで誰かに教えてもらえ…』

そう言うってから、ちよいちよいとリンスを呼ぶ。

「はい？何ですか？」

『悪い…フッ』

俺の目の前まで近寄ってきたリンスの顔面目掛けて素早い突きを放つ。

「ッ！？」

突然放たれた俺の突きを反射的に顔を横にずらして避けるリンス。

『ん…戻っていいよ』

「え？あ、はい…？」

納得しない顔で元の位置へ戻っていく。

「ち、ちよつと…」

何か言いたそうなエルを手で制す。

『リンス…突然突きを放って悪かったな…でも、コレで解ったただろ？』

「…はあ…？」

全員が俺を「え？なに訳わかんない事言ってるの？」的な目線で見
てくる…泣くぞ？

『今のは覚醒の片鱗だ』

「覚醒の片鱗…ですか？」

『そつだ…リンスの覚醒能力は、獣人の能力である 桁外れた動
体視力と反射神経と運動神経だ』

現に先程放った突きを反射的に避けれたら？と付け加える。

「なるほど…」

俺の言葉に納得するリンス。

「翔…リンスは解りましたわ。では私達は…？」

『それなんだが…今から模擬戦をしたいと思う』

「模擬戦…？誰と誰が？」

『俺とお前ら全員だ』

「マジで？」

『マジ。ちなみに、武器は用意しておくからな』

「ちなみに、何処で？」

『ん…今から用意してやる…』

目を瞑り心の中で唱える。

《開け》

俺の後ろからバキツと何かが割れる音がして…、

「「「ツ！？」」「」「」

突然俺の背後から黒い扉が現れた。

『俺は先に入ってやる事があるから5分後に来てくれ』

それだけ言って、扉を開き入って行った。

『さて…準備するか』

そう言っつて、創造し始めた…。

side リンス

先程突如現れた黒い扉の中に翔さんは入って行った。

「…なんだっただ？」

何を…なんて聴かなくても全員が意味を理解しているだろう。

「さあ…でも、あれは師匠の能力らしい」

「みた事ありますの？」

「ああ…」

なるほど…能力…ですか。

「皆…自分の能力は何だと思っ？」

ふと疑問に思っつたので言っつてみる。

「さあ…なんだろうな？」

「…解らないな」

「まあ、いずれにせよ、この後解りますわ」

「ですよね…あ…」

そこで翔さんの言葉を思い出した。

「そう言えば、翔さんは武器を用意するって言ったけど…皆は何にするの?」

「俺は剣だな…他の武器でも使えそうだけど」

「…鋼糸か素手かな」

「わたくしは弓矢ですわ…遠距離は必要でしょう?」

…なるほど。

「リンスはどうしますの?」

「私は…素手ですか…?」

「疑問形かよ…」

「スピードは有りそうだしいい判断だと思うけど…ナイフは持っておいた方がいいかもな」

むむ…ナイフの案は頭に無かったですね。

「じゃあ、私はナイフを持って接近戦ですか」

「俺もリンスと一緒に接近戦だな」

「俺は中距離で鋼糸を操り師匠の捕獲又は行動範囲を狭くする」

「わたくしは皆を支える遠距離ですわね…」

…あれ？私達であって数日だよな？

「今思うと、出会って数日しか経ってないのに息が合ってるね」

苦笑しながら言つと皆も苦笑しながらそうだなと返事を返してくる。

「さて…そろそろ5分ですわ…」

もう5分たったんだ…話してたから時間忘れちゃった。

「うし！サッサと行くか！！」

「…勝つ！」

「ええ！勝ちますわ！！」

「うん！！」

全員意気込みを入れてドアを開き入って行くのだった…。

能力の説明 (後書き)

感想又は誤字脱字をお待ちしております。

腕試合 (前書き)

タイトルは「うでだめしあい」と読みます。

腕試合

翔が出した黒い扉に入った俺達が見た光景は

「…すごい」

限りなく広い大草原に数えるのが億劫になるほどの武器たちが刺さっていた。

…何？この光景…。

『お？やつと来たか』

そう言つて、俺達の前に現れた翔…お前が5分後つて言つてたから待つてたんだが？

『それよりも…お前が見ている通り、剣とか色々な武器が刺さっているだろ？その武器達はどれでも使つてかまわないから、それぞれ使う武器を持って』

翔は『なるべく早くね』つとだけ言つて、寝転がった。

…いや、何で寝てんだアンタは。

「それよりも…早く選ばないとな」

そう言つて、近くに落ちてあつた銀色の糸を拾うギル。

…なんで、そんな武器まであんの？

「私は、ナイフですから…2本ぐらいでいいですよね」

そう言いつつも刺さっているナイフを抜くリンス。

あれ？みんな決断早くね？

「私は…これでいいですわ」

エルは近くにあつた弓矢を引き抜いた。

「…俺はコレかな？」

他の奴を見ながら俺も近くにあつた剣を手を取った。

「んじゃあ、武器の確保は終わりだな。おーい！翔起きろ！！」

大声を出して、翔を起こす。

「…反応無しかよ」

しかし、全く反応しない…。

「…試しに」

そう言つて、弓を構え矢をセットするエル…おい。何する気だ？

「…シッ！」

掛け声とともに弓矢を引いて撃った…。

俺達と翔の距離は100mぐらいだ…まあ、弓矢の場合一瞬で付くので、当たると思う。

俺達は翔を見ている

『…あぶねえ』

と、案の定飛んできた矢を転がって避けた。

「…チツ」

今盛大な舌打ちが聞こえたがスルーしておこう。

「翔…今から模擬戦だが、何の目的だ？」

『ああ…？さっき説明した通り、覚醒させるためだよ』

「誰から…？」

『全員』

「マジで？」

『大マジだ』

「翔。勝敗は如何しますの？」

ああ、それは聴いてなかったな。

『ん？相手が気絶するまで…ちなみに、倒れて吐いても続行。どんだけ傷ついても続行させるからな』

「マジで！！！？」

「それって、地獄じゃ…」

「リンス…もう受け入れるしかありませんわ」

「…楽しみ」

「…ギルだけね！！」「」

『俺も楽しみだぞ…いたぶるのがな（ボン）』

「今なんか危ない事言った!？」

『そんな事より、構えろよ』

呆れながら、言ってくる翔の言葉に各々武器を構える。

「なあ、異空間いっくわんに来る前に言った作戦でいいよな？」

「ああ」

「ええ」

「うん」

『んじゃあ 来い』

翔の言葉に戦いの火蓋が切って落とされた。

side 翔

俺が亜空間には行った直後周りを見渡す。

『…荒野だな』

果てし無く無骨で荒れている荒野だった。
流石に、これでは戦いづらいだろうと思ひ、草原を想像し詠唱。

『創造』

そう呟き、一拍置いてパシユンと音を立て俺を中心とした大規模な魔法陣が展開された。

『ん…チートだな』

相も変わらず一瞬で草が生えたことに能力の偉大さを再確認した。
とりあえず闘う場所が出来たので、次の工程に移る。

『創造』

今度は思いつく限りの武器を創造し、詠唱。場所はバラバラ、武器もバラバラで出てくる。

でている武器は剣から始まり、弓矢、ナイフ、刀、拳銃、棍棒、ラ

ンス、鋼糸、メイス、籠手など不特定多数。

『…ヤバい。とてつもなく暇になったな』

創造が終わり、やる事が無くなってしまった…。

『…あれ？』

ふと自分の持っている能力を思い出す。

『…亜空間の中で亜空間って使えるのか？』

近くにあった剣を持ち、上に放り投げる。

『開け』

詠唱を唱え、剣の落ちる場所に空間を開く。

重力に従って落ちる剣は亜空間の中へ入り、そのまま別に接続された亜空間から剣が落ち、俺の隣の地面に剣が刺さった。

『…これって、ほぼ無敵だな』

多分、剣だけでなく魔法も同じ様に出来るだろう。

…と言うか、これ使えば転移みたいに出来るんじゃない？

ふと思いついたことを実行しようとした瞬間に子供達が入ってきた。

転移の練習はまた後にしようとして心に決め、子供達に話しかけるのであった…。

＊

子供達が入ってから武器を選ぶ様に言って寝た。

誰が撃ったか知らんが、突然矢が寝ていた俺に向かってきたので横に転がり避けすぐさま立つ。

何故かエルが盛大に舌打ちしていた…撃ってきたのアイツかよ。

撃ってきたエルに対して心の中で嘆息しながら、子供達に模擬戦のルールを教え、戦いが始まった。

俺に向かって先頭で走ってくるのは、レインとリンス。

その二人と距離を開け、後を追う様についてくるギル。

レイン達とは違い、その場で弓矢を構えているエル。

…なるほどね。

レインとリンスは接近前衛系…武器は、剣とナイフ

ギルは中距離支援系…武器は、鋼糸

エルは遠距離支援系…武器は、弓矢

…お前等、最近会ったばかりだよな？なんで連携取れてんの？

少し連携が取れている事に驚きながらも近づいてきたレインとリンスの相手をする。

「オラア!!」

声を上げながら横から大振りしてきた剣筋を跳んで避ける。

「甘いです!!」

跳んで空中にいる時、左方向からナイフを逆手に持っているリンスが攻撃を仕掛けてくる。

俺はリンスの右肩に足を置き、肩を踏み台に更に跳躍する。

「シッ!!」

今度は跳んでいる俺目掛けて2つの鋼糸が攻撃してくる。

『甘いぞ』

それを、縦横と回転しながら避け着地。

「行け!!」

着地した瞬間、矢が襲ってきたので手で掴み押し折る。

『ん〜…中々連携が取れてるな』

そう言いつつ、子供達に微笑む。

『だがな…』

そう言った瞬間、レインが袈裟切りを仕掛けてくる。

俺はそれをしゃがんで避け、屈んだ状態から右足を軸に左足でレインの両足を払いを立っている態勢を崩させる。

「イテッ！」

態勢を崩させられたレインの喉元に刺さっていた剣を突きつける。

「ッ！」

『一人目』

驚いた表情のレインの頭を剣の柄で殴り気絶させる。

『さて…次は』

そこまで言い、近くに立ち止まっていたリンスに1瞬で近づき腹を殴る。

「う…」

小さく呻き倒れるリンスを支え、ゆっくりと地面に下ろす。

『お前等だ』

俺の言葉に警戒している2人を見て眺め、初めはエルの目の前に移動し腹を殴り意識を落とす。

エルが倒れたので、即効ギルの横に行き横蹴りで腹を抉る。

「ウグッ」

奇声を上げ吹っ飛んだギルに1瞬で近づき、腹に拳を打ちこみ気絶させる。

試合終了 所要時間10分足らず。

『…もうちょっと、改良の余地ありだな』

そう呟いて、子供達を回収するべく動くのだった…。

能力の片鱗
(前書き)

6 / 14 修正

能力の片鱗

俺達が倒れてからどれ程時間が経過したのだろうか…

俺は、おいしそうな匂いがしたのでノソリと起き上がる。

「…?」

目の前には、火と大きな鍋…そして、笑顔で起きた俺を見ている師匠がいた。

『おはよう、ギル』

「…おはようございます」

挨拶をして、周りを見渡す。

…どうやらまだ戦った草原にいるらしい。

『ギル。腹痛くないか?』

そう言われてみれば、少し痛むな…。

『痛いだろうから、ホレ』

そう言って、差し出してきたのは

「…師匠。コレなんですか?」

『ポーション』

透き通った様な青色な水を小さな透明な筒にいれたものだった。

「…ポーションってなんですか？」

『ん〜…薬だな。それも、結構な回復薬』

なんですかそれ…。

そう思いながらも、全て飲み込む。

『…どうだ？』

「…本当に結構が付くほどですね」

飲んだ瞬間腹痛が和らぎました…商品化できそうですね。

『直ったら良かったよ…ほら、コレ食べな』

そう言いつつ、皿にスープを入れて俺に渡してくる師匠。

「…頂きます」

手を合わせ言葉を言い、スープを食べるのだった…。

*

『さて…お前達に言いたい事がある』

俺がスープを食べ終わる頃には全員が起きポジションとやらを飲み、食事に着いた。

そして、食べている最中に師匠が全員の顔を見て

『…お前達個人個人に実力試験をしたい』

そう告げた。

side 翔

『…お前達個人個人に実力試験をしたい』

そう告げた瞬間に、エルが拳手してくる。

「何故個人に実力試験とやらを？先程の戦いで解ったのでは？」

『解っているが、個々で才能 覚醒を開花させたい』

「…それって、既に覚醒する能力は解ってるって事だよな？」

『その通り…てか、さっき気付いたんだよな』

子供達を回収している時にふと、考えたのだ…子供達を探す時に視えた人玉は何だったのだろうか。

回収していった順番を考えると

レイン エル ギル リンス

光り輝く人玉 虹色に輝く人玉 黒く蠢く人玉 半透
明な人玉

もう大体の人は気付いたと思うが、この2つは順番が重なっている。

そこで、覚醒について考えた。

レインは未来の勇者である…、

では、光り輝く人玉は、何か？

答えは、光の象徴とされる能力 即ち『光属性』ではないだろうか？

つと。まあ、こんな感じで推測していくと…。

レインは未来の勇者であり、光り輝く人玉⇨光属性が使える勇者

エルは妖精であり、虹色の人玉⇨全属性が扱える魔法使い

ギルは未来の魔王であり、黒く蠢く人玉⇨闇属性が使える魔王

リンスは獣人であり、半透明な人玉⇨身体能力が最も高い身体能力者

「俺が考えた事を子供たちに説明中」

「なるほどね…まあ、自分の力は少し理解したし翔は個々の能力を上げてくれるんだろ？」

『まあ、そのつもりだ…皆は不満はあるか？』

レインは何やら納得した様子だったので、全員に聴く

「不満はありませんが…どうやって、個々を見ますの？翔1人で一斉にバラバラに見れますの？」

『見えるけど？』

「「「見えるの!?!」「」」

「…流石師匠です」

何を驚いてんだ？と首を傾げると何故か化け物を見る様な目で見られた。

いや、約一名は尊敬の目で見て来たけどね…。

とりあえず、今日からじご…ごほん。少し厳しい特訓の始まりだ！

「「「何やら嫌な予感が…!」「」」

「…ふむ。楽しみだ」

約一名を除き、これからの事に不安を感じる子供達であったと云々。

修業の日々

『おーい！もうちょっと速く走らないと危ないぞー？』

「ヒイイイ！？」

俺の緩い声色とは逆に子供達は悲鳴を上げながら走る速度を上げた。それに伴い俺の走る速度も速くなっていく。

さて、今の現在行っている修業を簡単に説明しよう。

【鬼ごっこ】

皆が幼少期に一度はやったことのあるポピュラーな遊びだ。

…ただし、今回はただの鬼ごっこではない。頭文字に【リアル】がついた方だ。

鬼役である俺は棍棒の代わりに刀を持ち、子供達を追いかける。ちなみに、近づいたら容赦なく刀を振るうので子供達は真剣に逃げ回っている。

一応念のために言っておくが、手加減はしているぞ？

まあ、だが…俺だけ攻撃するのは面白くないので子供達にも攻撃しても良い事になっている。

現に逃げ回っているだけでなく攻撃してくるしな…。

「オラア！」

ギルだけが。

他の奴らはその隙に逃げてる。一応近くに落ちてる石を蹴って逃げる方向を阻害してるけどな。

「掠った!?今なんか掠った!？」

「お、落ち着きなさい!というか、それぐらい我慢しなさい!男の子でしょう!？」

「その言葉反則じゃね!？」

「ふ、二人とも落ち着いてください!このままじゃ…!このままじゃ、死んじゃいますよ!？」

「「一番リンスが落ち着いて!？」」

向かってくるギルを倒していい感じに混乱している子供達に向けて走り出す。

「もうギルを倒しやがった!？」

「相変わらず早いですわね!?!?!あれ、リンス!?!気絶しないでください!?!死んでしまいますわよ!?!」

「……………」

「…へんじがない。ただのしかばねのようだ。…てことで、リンスを囮に使うか」

「そうですね」

「ちよ、2人共酷いですよ!？」

「チツ!」

「ふえ!？まさかの舌打ちですか!？」

『止まってくんねーかなー!？』

「「ぎゃー!？絶対嫌だあああ!」「」

その後、絶叫しながら走り回る子供達が気絶するまで続けられた。

そして後日、子供達はこう語る。

【あれ…？鬼ごっこってあんなルールの遊びじゃなくね？】と。

再会

「ハア…ハア…もう…ダ…メ…」

レインはそれだけ言ってぶっ倒れる。

周りではレイン同様複数の者が気絶して倒れているが、参加しなかった龍人が介抱しているので心配無用。

「ふむ…こやつ等中々に筋がよいな」

『まあ、否定はしないが…まだまだだな』

近づいて来た一人の男が関心した様に唸り、そんな姿に苦笑を漏らした。

*

ことの発端は翔の一言だった。

『ん、そろそろいいかな？』

朝食を食べてる最中に聞こえた言葉に子供達は首を傾げる。

その姿を見て苦笑し、説明を求めるような視線に頷いた。

『お前らが色々と鍛錬を積んで結構経つ。全員得意な戦闘方法も確立されて来たし、経験だつて少なくて無い。互いにライバルと呼べる奴もいるし、俺みたいな格上との戦いにも慣れてきた頃だろう』

だが、と一旦間を置いて話を続ける。

『それじゃあ、ダメだ。相手のことを解っていれば大体の仕草や動作で先が読めるが、何時までも同じ攻略法じゃ他の奴には通じない。だから俺の知り合いに鍛えて貰え。今までじゃ出来なかつた経験が出来るだろうよ』

笑顔で言い切った翔に子供達は不安を感じつつ、新たな疑問を口にした。

「…なあ、翔の知り合いって誰だ？まさか、創造神じゃないよな？」
神と闘うなんて勘弁だぞ？と言いたげなレインに首を振り、エルに視線を送る。首を傾げられた。

『エルは一度会っているはずだ…よく思い出せ』

「ええ…？でも私達以外で会った人物なんて…」
そう呟いた直後に固まった。

エルは嘘でしょ？と言いたげな視線を翔に送り、視線を受けた翔は笑顔で頷いた。

「…いやいやいやいや！おかしいでしょう！？本当に頼む気ではいるんですの！？」

『落ち着け、取り乱し過ぎだ。…まあ、言いたいことは解るが既に頼んでおいたからキャンセルは不可能。ちなみに、あっち側は快く引き受けてくれたぞ？』

翔の言葉にエルは絶句し、周りは”いや、だから知り合いって誰だよ”と言いたげな視線を送っていた。

ちなみに、残りの子供達が”知り合い”を教えられて絶叫するのは数分後であつたりする。

*

そんなことが早朝にあり、”知り合い”である隣の特徴的な赤髪にキリツとした紅眼の強面の男　龍人化した炎龍の長と翔が介抱される子供達を眺めながら話をしていた。

『しかし、お前もよく引き受けてくれたな？』

鍛錬の相手を引き受けてくれたことに対して少し意外そうに呟いた。

「カッカッカ：いや、お主の弟子と言うのが気になってな？力試しというのも一興じゃろつて」

まあ、お主の弟子は意外と強くて張り合えたし、龍族としても色々と成長の糧となるから引き受けて良かったわい。

笑顔でそう言い切った長に”ちゃんと一族のことを考えてるんだな”と感心したように頷き、手を差し出す。

『これからもよろしく頼むぞ。炎龍族の長さん？』

「カッカッカ！こちらこそよろしく頼むぞ。人間族最強の者よ」

そんな会話のあと、朝まで続く宴で翔と炎龍族の長が酒を交わし、

名を呼ぶほどに仲良くなったのは余談である。

「ふえ！？私達の出番は!？」

「……………(スピー)」

出番のなさに自棄酒をして2日酔いになった子供達がいたのもまた余談である…。

決闘直前（前書き）

次への繋ぎ話です。

決闘直前

炎龍族と歓迎の宴という名のどんちゃん騒ぎが起きたのが数日前。

朝食を終えた俺を迎えたのは炎龍族の長であるフレイだった。

「翔…ちよつといいか？」

表情が少し冴えないが何か問題があったのだろうか？

俺は子供達に視線を送り、子供達は重要そうな雰囲気を感じたのか頷いて他の龍族たちの輪に入って行った。

『…んで、どうかしたのか？』

子供達が去るがいな、質問をぶつける。

フレイは少し迷った様だが、溜息を吐き話始めた。

「お主らが我らの里に入って数日が経つ。今更だが我ら龍族は他族との交流が無かった。いや、お主らと出会って龍族以外の種族がいたことを初めて知ったと言うべきか…。始めは興味が無かったのか干渉してこなかったがお主らが強いと解った瞬間、他の龍族たちが興味を示してな…」

そこまで言って、さらに深い溜息を吐いた。

「龍族は自慢じゃないと言えは嘘になるが、大体のモノは戦いにおいて強者ばかりだ。強者は自分よりも強い者と戦い、さらに自分を高める。…まあ、あとは察しの通り」

里にいるのは別の種族で強者ばかり、ならば戦わない道理がないって訳か…。

『ふむ…ちなみに挑んでくる龍族は？』

「氷龍や雷龍、黒龍や白龍以外の龍族の長だ」

…おい、それって下位の龍族全員じゃねえかよ。

「…言いたいことは解るが、我では止められぬ。上位の龍族たちも興味を示しているからなおのこと。しかも参加はしないが、観戦はするつもりだと言っていた」

マジかよ…どんだけ強者に興味津津なんだ。

「…これは龍族の決めた勝手な決闘だ。一応拒否は出来るが…どうする？」

拒否は出来るって言っても、それを断ったらお前の方に責任行くんじゃないか？

そんなことが表情に出ていたのか、さらに申し訳なさそうに頷いた。

『じゃあない…こっちもフレイに世話になってるからな。返さない訳にはいかんだろ』

そう言つと、少し驚いたあと微笑んでありがとと感謝を言われた。

…まあしょうがないか。俺も強者と闘えるのを楽しみにしてないと言ったら嘘になるしな。

「じゃあ、場所と日時だが

」

俺はフレイから決闘場所と日時を伝えられ、最後にその日に備えて体調を整えてくれとだけ言って去って行ったフレイの後ろ姿を眺める。

『…とりあえず、ひと眠りでもすっかな』

欠伸をかみ殺すことなく眠たげな目を擦って呟いた。

決闘×手加減×化かし合い (前書き)

2つに別けようかと思いましたが、ラストスパートを掛けて書き上げました。その為長文申し訳ない。

決闘×手加減×化かし合い

時刻は早朝というには少し遅く、逆に昼というには少し余裕があるそんな時間帯。

俺と子供達一行は巨大な龍になったフレイの背に乗せられ、目的地に向かっていた。

移動する事数十分。

フレイの飛行速度がゆるくなってきたので目的地周辺まで来ているのだらう。

その事に気付いた俺は寝ていた体を起こして辺りを見渡す。

出発時とは違い赤色一色の炎龍たちの中にちらほら違う色の龍が見えた。

「ふえ〜…ドラゴンさんがいっぱいですね…」

そんな和む一言が聞こえた他の子供達は苦笑した。

…強くなったな、リンス。

前のリンスなら気絶しそうなモノなんだが…と思いつつも、苦笑しながら適当に相槌を打っておいた。

「お、決闘場はあそこだな」

レインの指差したところをみれば、常人ならば絶対に上れそうになり崖の上に小さな人影が片手で数えるほど。その周りには不特定多数の龍たちがホバリングしていた。

決闘場らしき崖にフレアがゆっくりと下降し、地面に降り立ったのを確認し背から跳び下りる。

「…行くぞ」

フレイが龍人の姿になり、歩き出したあとをついて行った。

*

「…連れてまいりました」

フレイが漆黒の男と白銀の女を前に跪く。

そのことを発端に他の龍人の長も跪く。

慌てて子供達も跪いた。

俺、立つたまま。

そのことに気付いたフレイを含めた龍の長たちから”さつさと跪け”と言いたげな視線を浴びせてくるがガン無視。子供達は俺の性格が解っているのか、こっそり溜息を吐いていた。

「…ふむ、そちは礼儀を知らぬのかえ？」

透き通る声色で白銀の女が鋭い視線と共に問いかけてくる。
俺はその問いにただ真っ直ぐな眼で見返す。

『悪いな…初対面の奴に跪けるほどプライド捨ててないんだわ』

俺の言葉に一瞬キョトンとし、次の瞬間笑い声が響いた。

「アツハツハ！そりゃ、すまんかったのお…だが、お主を除いた子は跪いておるが？」

『ああ…そりゃ、アンタが美人だから思わず跪いたんじゃない？』

「ほお…世辞は嫌いじゃが、偽りない言葉は嫌いではないぞ」

優雅に微笑みはするが、その視線の鋭さは衰えてないどころか増すばかり。そんな視線を涼しげに受け流しながら、不敵に笑う。

「…肝が据わった男じゃ」

『お褒めに預かり光栄です…白龍殿？』

「…クツクツク、主に言われたら嫌味にしか聞こえんのお」

互いが不敵に笑い、白龍が声を張り上げた。

「面を上げい！今から決闘を開始する！！両者決闘する者は地上に残り、他のモノは安全な場所にて観戦せよ！！」

その言葉を最後に、俺と明らかに体と不一致なぶかぶかした服の少年が残り、他は空に飛ぶなり被害に遭わなさそうな場所に移動し観戦を決め込んでいる。

「お兄さん…強いのか？」

見た目相応の笑顔…と不釣り合いな殺気。見た目はシヨタとは言え、流石は龍族の長とだけあるな、と感心しながら殺気を受け流し笑顔を崩さず口を開いた。

『それは戦つてからののお楽しみ…ってことでどうかな?』

軽い殺気をぶつけければ、少し驚いた表情のあとすぐに面白そうにクスクスと笑う。

「そりゃそうだね…早く始めようよ…ウズウズしてきちゃった」

『クツクツク…そこは年相応なのな』

喉を鳴らしながら笑っていると、上空から甲高い音が響いた。

さて、試合開始だ。

side 三人称

試合開始の音が鳴り響くと同時に二つの影が掻き消え、何か衝突する音と共に中央に暴風が巻き上がる。

「わぁ！早いね！」

ぶかぶかの服からでた小さな拳は何かを纏い、翔の拳を威力を相殺。そのことを一瞬で見抜いた翔は少年を蹴り飛ばそうとするが、その前に翔の顔面に衝撃がはしり吹き飛ばされた。

「お兄さんやるね…わざと自分から後ろに跳んで衝撃を限りなく少
なくするなんて」

『ふう…ま、それだけじゃねえけどな』

宙返りの要領でふわりと着地した翔の一言と同時に少年の口から血
が滲み出た。

『掌底の味はどうだった？』

「何時の間に…気付かなかったよ」

不敵に笑う翔に合わせてニヤリと笑う。

刹那、二人の姿は掻き消え、衝撃と一拍遅れて響く打撃音を辺りに
まき散らす。

その姿をほとんどの者は確認できず、衝撃と打撃音で闘っているこ
とをどうにか分かる程度である。

しかし、一握りの見える者からすれば試合は徐々にエスカレートし、
互いに一步も譲らぬ高速戦闘を繰り広げている。それを面白そうに
見る者もいれば、二人の実力に驚いている者など十人十色。

そんな中で、二人は先程と逆に位置に入れ替わり闘気を充満させて
いた。

「お兄さんが初めてだよ…ボクの速度についてくれるのは」

『そうかい…しかし、幾度か殴り合ってるお蔭で少年が使う属性が
解ったよ』

少年はクスクスと笑いながら先を促す。

『属性は”風”。最初の顔面の衝撃は風を凝縮させて放った一撃だろ?』

少年は翔の言葉に手を叩き、満面の笑顔で正解!と応えた。

「どうやらお兄さんを侮っていたようだよ…次から少しスピードアップかな?」

言い切る前に数メートル離れていた距離を一瞬で詰め、翔の鳩尾目掛けて突きを放つ。

だが、いくら速度が上がったからと言って翔が反応出来ないはずもなく、難なく受け止めようと拳を開いた瞬間　高速でその場から跳び去った。

「どうしたのかな…てっきり受け止めてくれると思ったんだけど」

クスクスと笑う少年の言葉に翔は溜息を吐く。

『…誰がドリルみたいな拳を受け止められるかよ』

少年の手を見れば、視認できる程の密度の風が渦巻き、さながらドリルといえる。

そんな受けたら致命傷の危険物を例え翔といえども真正面から受け止められたものではない。

「そっか…じゃあ、これはどうかな?」

少年は無邪気な殺気と共に魔法を詠唱。刹那、翔の周りに不可視の刃が飛来する。

飛来してくる刃を翔は紙一重で避け、高速で移動し少年に近づいていく。

「わぁ…よく避けられるね。じゃあ、これは？」

先程の倍の刃と翔を囲む様に現れた4つの竜巻は高速で移動する翔を捕捉し、次々に向かっていく。

しかし、高速で移動する翔は徐々にスピードを上げ逃げ切る。

「うわー！凄いやい！！」

キラキラとした目は最早音速の域に達している翔を捉えていた。

『…そろそろいいか』

今まで何もしてこなかった翔が突如として、跳躍。先程までいた場所には無数の傷が刻まれていた。

翔は空中でポツリと眩き、袖から一振りの刀を抜き出す。

そして空中に足場を創り、翔を切り刻まんとする刃を紙一重で避ける。

ついでとばかりに4つの竜巻に向けて手を扇ぎ少年の創った竜巻と同じものを新たに発生させ相殺。

少年は少し驚いた表情をしてから歓声の声を上げた。

「凄いやい！！ボク以上の風の使い手がいたなんて！！」

無邪気にはしゃぐ少年に翔は不敵に笑い、声を張り上げた。

『少年…同じ風を操る者としてケリをつけようじゃねえか！！』

腰を落とし、刀の鞘を左腰に携え右手で柄を握る。所謂”居合”つてやつだ。

少年は翔の言葉に不敵に笑い返して視認できる程の風を身体に纏わす。

周りで見ていた者は皆が息を呑み、静寂と闘気と殺気が入り混じる空間で誰かが漏らした吐息。

その吐息を合図に両者の姿が残像を残しぶれる程の速度で片や空を駆け抜け、片や地を疾走する。

両者が走り抜ければ、小さな風は暴風となりて辺りを蹴散らし、空気を切り裂く。

そして、2つの暴風は衝突し 辺りを吹き飛ばした。

巻き上がる砂のせいで視界は不良。

決着の末の勝者はどちらなのかと観戦していた者は固唾を呑んで見守る。

次第に見えてきた場所には

少年が立っていた。

勝利と宴と美女と酒

少年が立っていた。

その結果に風龍たちは歓喜の咆哮を大空に響かせる。

他の龍族たちも、称賛の咆哮を響かせた。

しかし、咆哮も称賛もしていない者達はある。

翔を知りうる子供達だ。

1人の少年は、首を傾げながらもぶかぶかの服を着ている少年を眺め。

1人の少女は、耳に手をあてて目を瞑る。

1人の少年は無心に前方を眺めて腕を組み。

1人の少女は頭に手を置き溜息を吐いた。

そのことに他の龍族の長達が首を傾げ、どうしたのかと訊こうとした時、

「来ます」

今まで耳に手を当てて瞑っていた目を括目させ呟いた獣人の少女。周りが何が？と訊くまでも無く何処からともなく、響く声色。

『スリ斬り』

億閃』

刹那、カチンツと鉄同士が合わさる音を切っ掛けに、辺りを見回し警戒していた少年の身体の至る所から鮮血が飛び散り、音も無く崩れ落ちた。

突然の事に周りは固まり、子供達は盛大にため息を吐いた。

「やりすぎですわ…」

妖精族の少女の眩きに応える様に何処ともなく姿を現した。

何時までも固まっている周りを無視して、刀傷が酷い少年の身体に軽く手を置き詠唱。

すると、先程まで酷い刀傷を負っていた少年の身体が突如発光し、光が止む頃には何事も無かったかのようにすやすやと寝息を立てていた。

『…おい、いつまでフリーズしてんだよ』

「う、うむ…勝者、人間族の翔!!」

寝ている子供を姫様抱っこで龍族たちの前まで移動させ、呆れた視線で龍族たちを射止める。

突然の急展開に驚く白龍の宣言で一瞬の静寂のあと、空に割れんばかりの咆哮が響いた。

周りにいた龍族の長たちも呆気をとられた表情を見せ、ただ1人翔の実力を前から知っていたフレイだけ「規格外め」と疲れたように呟いた。

*

『プハー！美味しい！！』

あれから時間は過ぎ、今では草木も眠る時刻。

翔は称賛の嵐と決闘の勝利の宴と言う名のどんちゃん騒ぎから抜け出し、1人静かな丘で酒を飲んでいた。

満天の星空の中にポツリと淡い輝きを発する満月を眺めながら月見してえーな、などと呟きながら持っていた酒を後ろに放り投げた。

「…なんじゃ、気付いておったか」

静かな夜に響く透き通るソプラノボイス。

気配は最初から気付いていたので、当たり前だろ。と欠伸をしながら答えれば、つまらないと言いたげな表情で先程投げた小瓶で小突かれた。

「のお…主は何者じゃ？」

『はあ？人間族代表だけど？』

何言ってるのコイツ？的視線で見れば、笑顔で拳を構えられた。まあ、速攻土下座して謝ったよ。許してくれたか分ないけどな。

「はあ…真剣に話そうとする妾が馬鹿みたいではないか」

溜息を吐く白龍にそうだね！と満面の笑顔でツッコめば顔面を殴ら

れた。理不尽だ！！

「どこがじゃ！全く…主は搦めん奴じゃのお」

『クツクツク…まあ、性格は人それぞれってことで』

「ふん…喰えん奴じゃ。ほれ」

酒をがぶ飲みしてあと残りわずかの酒を寄越してくる白龍に苦笑し、
一気に飲みこんだ。

「…なんじゃ、その眼は」

『クツクツク…美女と酒が飲めるとは幸運だと思ってな』

「ふん…心にも思っていない事を」

渡された酒を一気飲みする白龍びやくりゆうに競うように酒を飲む人間じんげんを満天の
星空と満月の光が照らしていた。…夜はゆっくりと更けていく。

黒龍

「最近弛たるんでいる部下たちを鍛えてくれ」

フレイの溜息と共に言われたのが数時間前。

『アハハハ！さっさと動かんかい！！』

「……もつやだこの鬼畜！！」「」

リアル鬼ごっこをしているのが数十分前。

『ハーイ、今から寝た奴半殺しな』

「……スピー……」

「……（合掌）……」

正座の睡魔耐久レースを開始したのが数分前。

『あー、喉渴いた』

「……水をどうぞ！！」「」

「お主らは何をやっとなるんじゃ！！」

部下を舎弟化させたら白龍に殴られたのが数十秒前。

「……」

『…いや、何か喋れ』

白龍が部下たちを連れて何処かに消え、入れ替わる様に近づいて来た黒龍と重たい沈黙が支配する空間で思わずツツコミを入れてしまった今現在。

どうしよう…この子しゃべんないんだけど。というか、この子何の為に近づいて来たんだ？理由は何？頼む、理由でなくてもいいから喋ってくれ。お願い、100円上げるから。

「……………」

ヤバイよ喋らないよ、この子。

どうしたらいい？お願い、誰か教えてくれ。今なら120円上げるから。缶ジュース一本買えるから。

あ、自力で何とかしろ？いや、それはあまりにも酷

「頼む！！私を鍛えてくれ！！」

ツベー、マジヤベー。どれくらいヤバいかというと、マジヤベー。

いきなり土下座されたよ。こちらから見惚れるくらいの土下座されて一瞬柄にもなく呆けてしまったジヤマイカ。じゃなくて、じゃないか。…うん、少し動転してしまった様だ。落ち着け、自分。今からタイムマシン探せばまだ大丈夫だ。

『…スー…ハア…うん。とりあえず、立ってくれませぬか』

深呼吸して一度思考をクリアさせる。語尾がおかしくなったが誰もツツコミまない。黒龍は黙って立ち上がってくれただけ。ツツコミは

しないタイプらしい。

『よし…とりあえず、何故鍛える必要があるのか、理由を含めて説明してくれ』

真剣な表情で言えば黒龍は一瞬躊躇して、溜息と共に口を開いた。

曰く黒龍は生まれつき強者の部類に立つ。

曰くその性が同じ強者と闘うことが少ない。というか機会がない。何故なら本能的に怯えられるて、戦いすらせず逃げられるから。

曰く黒龍と唯一闘えた白龍から”お主は手加減を知らぬのか!!”と説教されたらしい。

曰くなので手加減出来る様に鍛えてほしい。

…まあ、白龍に部下を鍛えるの止めさせられたし丁度いいっちゃいいかな。

そんな事を思いながら、とりあえず承認する。

「…よろしく頼む。師匠」

『いや、師匠って呼ばなくていいよ。ギルと被るし』

あの子は…まあ、口癖みたいなもんだから訂正させるの諦めてるし。

そんな感じで頭を下げてくる黒龍に苦笑しながら鍛錬の方法を練りだすことにした。

黒龍（後書き）

ちよつとした裏話

当初黒龍はクールキャラで翔と渡り合えるほどの最強チートだったのですが、この作品主人公最強系だし…と思い直し”手加減が出来ない少し可哀想な子”という設定にしました。あ、どうでもいいですか。そうですか。

手加減の方法

舐めてた。本当に舐めていた。
コイツが此処まで手加減できないとは…。

溜息を吐きながら目の前でぶっ倒れている黒龍を眺める。
コイツを沈めたのは勿論俺。というか、俺と白龍しか止められない。
まあ、白龍は”お主に任せた”とかなんとか言っただけ。
しかし、何度も言うけど舐めてたね。

まさか、山一つ消し飛ばすなんて。

所謂黒龍ドラゴンブレスの息吹ってやつだ。

ちよ！おまツ！！とか言っちまった俺は悪くない。あと本気で回転式踵落とし決めた俺は悪くない。
ったく…ここが亜空間内じゃなかったら他の龍族たちからバツシン
グくるんじゃないかねえか？あと白龍。

『おい起きろ』

ぶっ倒れてる黒龍の口に水を無理やり流し込む。

「ブフオッ！」

口から勢いよく吐き出された水を華麗に避けつつ、起きたのを確認して軽く足蹴り。

ジト目で見えてくる黒龍に早く立ち上がれと催促する。

「…だから言っただろう。手加減は出来ぬと」

『いや、あれ程の力は予想外だった…ついでに言えば回転式踵落としも予想外だった』

「それは私の台詞だ」

溜息を吐きながら呆れた目線で見ってくる黒龍。失礼な奴だな。

『さて…もしもの時に創っていたが、こんな時に役立つとわな』

懐から一つの指輪を取り出し、黒龍に渡す。

渡された本人は首を傾げながら、指輪を詰め　片膝をついた。

『あ、それ力を吸い取る能力あるから』

ついでに言えば強制的に弱体化させる力もあるね。

笑顔で言えば”先に言え馬鹿者！！”と怒鳴られた。うん、そりゃ急に力抜けたら驚くか。ゴメンゴメン。

「おっと…むう。これは不便だな」

おぼつかない足取りで立ち上がり嘆く。…でも、それ以外方法が見つかからないんで勘弁してくれ。

そんな感じの言葉を言ったら仕方がないかと渋い表情で頷いた。

『安心しろ。それを付けてれば手加減できる感覚が身に付くから』

試しに全力のドラゴンブレス吹いてみな！と元気に言えば、訝しげな表情で睨んでから何故か達観した表情になり頷く。

『…なんだその【何を行き成り…いや、こいつの言動が変なのは今更か…ではしょうがないな】みたいな表情』

みたいな、ではなく全く以てその通りなのだが…触る神に祟りなしだと言わんばかりに黒龍は無表情で対応した。

「それよりも、本当に大丈夫なんだろうな？」

言外にお前、指輪の効力について何か隠してないか？と言っているが、当の本人は無邪気な笑顔で口を開く。

『大丈夫…その指輪は一定の強さを越える威力を含んだ瞬間、ランダムで身体が状態異常に陥る様になってるから。文字通り身体に教えてるだろ？』

「ナイスアイデア！と言いたげな表情に、黒龍は一瞬”コイツにブレスやっちまおうか”と思ったが既に指輪を填めているため止めおいた。ちなみにこの指輪、一度填めたら完璧に制御できるまで外れないという鬼畜使用。嫌でも制御を出来てしまうのだ。」

「はあ…では行くぞ」

早く早くと急かす翔の手に握られている刀は見なかったことにして、とりあえず殺されない為にちやうと半ば自暴自棄になっているのしょうがないことだと思っ。

黒龍の口元から収束される魔力は桁外れに高く、翔ですら毛が立つ感覚に見舞われる。

これが直撃でもすれば、文字通り灰すらの残らぬだろう。

『そろそろ…か』

そう呟いた瞬間、黒龍の口元の収束されていた魔力は直径10メートルにもなり、色は黒に染まる。まさに規格外の一言。ただ、そこに存在するというだけで圧倒する。翔でなければ、気絶してしまう程に。

黒く染まる魔力が放たれようとした時、黒龍が一瞬身体を振るわせ収束した魔力が拡散された。

『おつと…こりゃ、”麻痺”かな？』

ゆっくりと倒れる黒龍の身体を支え、目視できるほど青い閃光にバチバチと音をたてる。それは即ち”雷”。言葉を状態異常に直せば”麻痺”と言ったところだろう。

しかし、黒龍を倒す程の麻痺とは…まあ、製作者が自分とはいえ恐ろしいモノだ。

そんな感想を抱きながら、気絶した黒龍をそつと地面に寝かす。黒龍は今さつきまで麻痺に襲われたとは思えないほどすやすやと寝息を立てていた。それは黒龍である故の回復力の賜物なのだろう。というか、龍種は他の種族に比べて自然回復の速度が早い。体力を限界まで使って倒れても、1日経てばケロリとしてるし、今みたいな状態異常に陥れば数分とかからないうちに全回復。全く以て天然のチートである。

『…もつとキツイ事させても大丈夫か？』

いや、それは流石に駄目か…と苦笑している翔の傍一瞬身体をビクリと強張らせた黒龍は見なかったことにした。

修業の成果

「やるではないか!!」

「まだまだ!!」

手加減の最終試験。内容は白龍相手に手加減すること。最初こそ子供達にやらせようとしたんだけど…まあ、拒否られました。"死にたくない"って。…いや、そりゃそうだろうけど、お前ら結構強くなってるよ？俺を相手にしてるから気付いて無いだけなんだから。

この前、龍族の部下たち相手に互角に戦えてたのは、驚いたね。元々体のスペックが違うし…龍族なんて生まれてから数日で天然チートだしな。

閑話休題。

さて、笑顔でどつきあってる2人をそろそろ止めるべきか…。辺りを見れば、攻撃が飛び交うことに地面とか挟れてるし…それなんてバトル漫画？

『おい！そろそろ終いだ!!』

俺の言葉に互いが拳を顔の数センチ前で静止。辺りに風と衝撃波がまき散らされた。…だから、それなんてバトル漫画だよ。

「うむ…ちゃんと手加減できるようになっておるではないか」

「……………まあ、それはそうだろ」

黒龍は何ともいえない雰囲気を出しながら、ちらりとこっちを見る。

まあ、あの指輪のお蔭とはいえ普通に”火傷”とか”毒”とかの状態異常になるから何ともいえないのは理解できるんだけどな…。あれで成果なしだったらキレられても文句は言えん。てか、立場が同じだったら速攻殴ってるね。

「うむ…では宴じゃな!!」

お前は酒飲みたいだけだろ!とツッコみたかったが、他の龍族たちも早速準備しているのでやめておいた。

「…翔の言いたい事わかるぞ」

うんうんと頷きながら近づいて来たレインたちを見て、溜息をついた。

『…お前からそんな言葉が出るとわな』

「…いや、俺/私達も同じ意見だから」「」

ジト目で見れば、どこ吹く風のように流された。…コイツら、俺に対してなんか厳しくね?

「…大丈夫ですか?」

…ギルが女だったら惚れてるね。なんて優しい子なのかと。

まあ、戯言だけど。俺が惚れるなんてまずないし。

「「「さあて宴だ!」「」」

「歌って踊って騒いで飲みまくれ!」

白龍たちが既に宴を開始しているのを見て、溜息を吐いた。
でも…こういうのも悪かないだろ。

『飲みまくるぜー!!』

「「「イエイー!!」「」」

次の日、二日酔いに襲われたのは当然のことと言えた。

別れ（前書き）

1ヶ月も空けてすみませんでした！
詳細（というなの言い訳）は後書きにて…。

別れ

「皆さん起きてください!!!」

毎日起こしにくるリンスの声を目覚まし代わりに緩慢な動きで上半身を起こし、欠伸と共に伸びをする。

「……っ はあ」

長い伸びのあとに、頭が惚ける。ついでに声まで惚ける。そんな俺の姿にリンスは苦笑しながら朝食ですよと促し、テントを出て行く。とりあえず、二度寝したい衝動を抑えて朝食の為にテントの外に向かった。

「おはよ」

『おお、起きたか。顔洗って来い』

いつも通りの挨拶を済ませ、促されるままに近くの川に向かう。両手で透き通る水をすくい、顔につける。眠気が覚める程冷たかったが、時折頬を撫でる風が心地よかった。

「師匠出来ました」

『おお、んじゃあ盛り付け頼む』

「了解」

顔を洗い終わり、朝食の為に戻れば翔とギルと一緒に料理していた。……そっぴや、あいつらの料理の味が美味過ぎてエルとリンスが頂垂

れてたな。

何でも”ま、まあ…これだけの味があれば私達の料理の出番は必要ないですわね”とか”これは…いや美味しんですけどね。なんていうか…立つ瀬がないです”とか。エルは何か悔しそうな顔をして、リンスは若干泣きそうになりながら呟いてたな。その二人を見ていた翔とギルは、苦笑してたけど。ついでに俺も苦笑してた。

「さて…レインたちは皿を配ってくれ」

最早当たり前となっている工程で、翔が亜空間から出す皿を皆に配る。皆つてのは龍族たちで、最近翔の料理を食べるようになったのだ。

最初に食べた時は龍族全員が口を揃えて”これから毎日作ってくれ！！”と土下座したのは記憶に新しい。というか、多勢が一斉に土下座するってどんだけだよ…と引き攣った表情をした俺らは悪くない。

翔は苦笑して頷いてた。

「おお！！来た来た！！」

「おい。お前の目玉焼き寄越せ！！」

「だが断る！！てか、お前は自分奴あるだろうが！！」

『お前ら…まだおかわりあるから』

「」「おおお！！」「」

騒いでた龍族の数名に苦笑しながら諭す翔を見て流石だなと思う。何故か隣で胸を張ってるギルは無視しておいた。一応言っがお前を

褒めている訳では無いからな？

そんな感じの朝食。

*

「おらあ！」

「ふんっ！！」

食後の準備運動がてらに、龍人对の肉弾戦。

対戦相手は地龍族の1人で、接近戦が得意な奴だ。翔曰く地龍は接近戦の天然チートらしいが……なるほど、言い得て妙だと納得。こいつ、俺の攻撃が喰らってねえ。

「グッ！」

相手が蹴り飛ばしてくるのを利用して後ろに下がる。咄嗟に後ろに跳んだお陰かダメージは少ない。

「…はあ」

迫ってくる相手を見殺しして深呼吸。右足を半歩後ろに下げ、右足の裏に魔力を溜める。迫ってくる相手は急速に集束された魔力を察知し一瞬驚いた表情をするが、直ぐに愉しそうに笑いさらに速度を上げて突っ込んできた。

「らあっ！」

「甘い!!」

相手があと一步踏み出せば拳が中る距離にきた瞬間、左足を軸に右足で相手の脇腹めがけて振り抜いた。タイミングは完璧。溜めていた魔力を爆発させたお陰で速度はさらに上昇。普段の蹴りでは絶対に越えない速度を突破し、驚くぐらいカウンターが決まった。

「……ぐっ!？」

「……甘いのはどっちだ？」

はずだった。

しかし、相手は魔力が爆発した瞬間に魔力で左手の甲を強化し、俺の右蹴りを弾き、驚愕のあまり固まった俺を殴り飛ばした。

……成る程、地龍は接近チートの意味をたった今本当に理解した。

「……あれに対処できるとかマジありえんだろ」

「わっはっは!」

豪快に笑いながらスルーする相手をジト目で見つつも、差し出してくる手を借りて起きあがった。

「……口切れてんな」

「そうか、後で洗っとけよ?それよりも……」

呼んでるぜ、と指さす方を見れば翔が手招きしていた。

*

「何かあったのか？」

切れた口内を魔法で治して翔の所に集合。ギル達も呼ばれていたのか既に到着していた。

『用事ってというか、まあ此れからのことについてな』

一旦言葉を切った翔に顔を見合わす俺達。

『明日、ここを出ていく』

「「「「「……………」」」」」

まあ、言葉を切った時点で全員が解っていたようで驚きはしなかった。というよりも、疑問が浮かんだり…………。

「あの、何故今になつて？」

リンスの疑問は尤もだ。元々翔は一ヶ所に留まることが少なかった。留まるにしても長くて精々2・3日程度なのだ。しかし龍族の里には数ヶ月以上留まっている。不思議に思わない方がおかしい。

『ああ、そりゃあれだ。お前達の相手をしてくれたんだ。多少の恩返しをしないと駄目だろ？』

まあ、飯とか作ったが気に入った様で良かった。と笑う翔に俺達は呆気に取られた。

『ん？どうした、そんな間抜け面晒して』

「えっ、いや…」

まさか、翔がそこまで考えていたとは、なんて口にだせない」

『聞こえてる聞こえてる』

ハッと口を抑えた俺に翔は苦笑して、明日旅立ち準備をしとけと言
い残して、去っていった。

「……明日から地獄か」

呟いた瞬間、頭におたまが飛んできた。地味に痛かった。

*

「ふむ…お主らが出ていくのか。ちと寂しくなるの」

『そう言っても、これ以上は世話になるわけにはいかんよ』

出発当日。

俺達の旅立ちを全龍族が総出で見送ってくれるらしく、前方を視界の限り埋め尽くす龍化した姿は、まさに圧巻であった。

今は、翔とハクさん（本人からそう呼べと言われた）が苦笑を交えて談笑している。

その間に俺達は他の龍族の長さん達に別れを告げた。

「達者でな」

「ふふふ…また君たちと戦いたいな」

「…また何時でも遊びにこい。私たちは君たちを歓迎する」

炎龍のフレイさんから、風龍のフーケさん、黒龍のクロさんの言葉に涙ぐみながら笑顔で返事を返す。

「…また逢おう……死なないことを祈る」

他の龍族の長さんの言葉に別の意味で泣けた。…そんなに憐れみと優しげな目で見なくても。

『…なんで泣いてんだ？』

「…「なんでもないです」」

別れの言葉を済ませた翔が怪訝な顔をしてから、優しげな笑みで俺達の頭を撫でた。

…この涙は別れの涙ではないんだけどな。

むしろ、あんたに関しての涙ですと全員の心が一致したような気がした。

『んじゃ、またな』

「「「またいつか」「」」

俺達は手を振りながら見送ってくれる龍族に背を向け歩き始めた。

別れ（後書き）

最近パソコンがインターネットに繋がらないという事件が発生したため、これからは携帯からになりそうです。結果、パソコンの時に更新速度が遅くなりそうですが、なるべく更新を頑張りますので、これからもよろしくお願い致します。

かくれんぼ

『…うし、始めるぞ』

龍族から別れて、はや数日。朝食を食べ終えた頃に、俺は首を鳴らしながら口を開く。

『今から1週間、隠れる俺を見つける』

「…………それが今回の課題か？」

今度はかくれんぼかよとため息をつくレインの隣でエルが問いかけてきた。

「範囲、ルールなどがありますの？」

『ああ、範囲は直径10キロでルールは、基本的に何でもありだ。但し、期限内に見つからなかった場合…………』

「…………見つからなかった場合…………？」

『俺の作る朝昼晩の三食を1週間禁止する』

「うわ…………それ何気にキツいな」

「…………なら逆に見つけられたらご褒美とか貰えませんか？」

「…………それだ!!」

リンスの言葉に最後に食いついたエルとギルに苦笑しつつ、少し考えてから頷いた。

『罰が飯抜きだから、もし見つけれたらご褒美として、1週間食べたい料理を作るってのはどうだ？』

ご褒美の内容にはしゃぎだす子供たちに笑いながら呟く。

『勿論、俺からの妨害があるからな』

騒いでいた様子が一变、ピタリと動きが固まった。あまりにも、息がピッタリすぎた為に笑いそうになったが、そこはなんとか堪えて虚空に手を振り亜空間を出現させ、4つのバツクと入れ替わる様に音もなくな中消えていった。

*

「……………はっ！翔はどこにいった？」

翔が消えた数秒後に意識を取り戻したレインの言葉に固まっていた子供たちも急いで意識を取り戻して辺りを見回す。当然ながら既に見えない翔を探すのは諦め、翔の置いていった袋を掴んで中を覗いた。

「……………準備万端かよ」

袋の中に入っていたのは、サバイバル道具一式。中身の確認を終えれば、即話し合い。話題は勿論、かくれんぼである。

「翔を探す案はあるか？」

「…そうですね。わたくしは二手に別れて探す方が効率的だともいますわ」

「確かにエルちゃんの言う通りですね」

「…だが、振り分けはどうする？」

ギルの言葉に他の子供は声を唸らせ、あれやこれやと各自発言し、最終的にはレインとエル、ギルとリンスという組み合わせに落ち着いた。

「んじゃ、互いに頑張ろうぜ」

「どちらが早く見付けるか、競争ですわ」

「はい！負けませんよー！！」

「…了解」

「……死なないように」

円陣を組み拳をぶつけて、不敵に笑いながら二手に別れて歩きだした。

【……………】

その姿を木の枝の上で眺めていた一匹の動物は音もなく消え去るのだった。

それぞれの一日目

空は雲ひとつない晴天、辺りは緑に囲まれ静寂が包む。時折聞こえるのは小鳥の囀りや羽を広げて飛び立つ音ばかり。

『……………』

ぼつりと円上に拓かれた森の中で、目を閉じ胡座を搔いて心を無にする男が1人。言わずとも知れた一ノ瀬翔である。が、当の本人は微動だにせず、舞い降りてきた小鳥は動かない肩に乗り囀ずる。その姿はまるでそこだけ切り取られた絵の様に静かで一種の神秘的な雰囲気醸し出していた。

『……………来たか』

閉じていた目をゆつくりと見開き、小鳥が空に羽ばたく音を耳にしながら虚空に話しかける。

【報告、つい先程二手に別れ御主人を探し始めました】

『ふむ…まあ、時間と範囲からしたら妥当か』

目の前に音もなく現れたのは、漆黒の毛並みをした黒い猫。人語を喋る明らかに普通ではない猫の報告に翔は唸り、膝をパンと叩き口を開いた。

『…ならそのまま監視を頼んだ』

【御意】

現れた時同様に音もなく立ち去った黒猫を見送ると、ため息をひとつ。

『…………ふう』

静かに目を閉じ、草木が揺れる音を聞きながら再度瞑想を開始した。

Side レイン&エル

二手に別れて、数時間が過ぎた頃。

「エル、そろそろ休憩しようぜ」

「…そうですね」

荷物を下ろして地面に座り込むエルにレインは辺りを見回す。

「…………日も落ちてきたし今日はここで野宿か」

「それならば、火を焚きましょう」

決まれば即実行と言わんばかりに素早く落ちている小枝を集め、魔法で火を起こして、荷物の中に入っていた携帯食料をもそもそと食べる。

「……………」

「……………」

「なあ、エルひとつ言っていていいか」

「…わたくしもひとつ言いたいですわ」

「…翔の料理は偉大だった」

ため息を吐いて残りの携帯食料を食べ進めるのだった。

Side ギル&リンス

「……………」

「あ、あのギル君？私も何か手伝いましょうか？」

「……………盛り付け頼む」

「はい！わかりました！！」

サバイバルらしからぬ和食のフルコースが出来ていたり、何気に充実している2人だった。

魔と獣の者の二日目

日が昇り始めた早朝、相方とも呼べる少女が未だ夢の世界に居着いている時間帯。武に励む1人の少年がただひたすら拳を、足を仮想の敵に向けて振るっていた。

「……………」

風を切り裂く音を奏でながら、無心に次に繋げるように舞う。鍛練を数分間から数十分に及び励み、終了間近の頃合いに腑抜けた声色が近くから聞こえてきた。

「邪魔しちゃいましたか？」

「…いや、丁度終わる頃だった」

リンスの言葉に首を振って、木の枝にかけていたタオルで汗を拭きながら答える。

「…朝飯作るう」

「お手伝いしますね？」

そういつて2人は朝食作りに取り掛かった。

*

「今日は何だか雨が降りそうですね」

朝食を食べ終えれば限りある時間を移動に当てる。空を見れば、徐々にだが雲が集まってきているのでこのままではリンスの言葉が実現するだろうな。とギルは考えていた。

「……………」

「……かしまりましたか？」

突然首を傾げて辺りを見回すギルにリンスが疑問の声を上げる。しかし、ギルは唇に人差し指を当てて黙殺した。

「……………」

「……………」

二人が黙ったことで、辺りが静寂に包まれる。ギルは警戒したように辺りを見回し、リンスはものの数秒で異常に気付いた。

……………動物の鳴き声が聞こえない。

「……………リンス」

「……………何かいますね」

ギルは視線で、リンスは直感的に何かがいることを理解して自身の武器を構える。

「……………」

数秒の沈黙が場を支配し、緊張感が高まる2人は互いに背を預けて

辺りを警戒する。

しかし、いつまでも経っても攻撃される気配は無い。

「……消えたか」

「なんだったんでしょね」

幾らか時間が経過したところで気配が唐突に消え去り、先程まで聞こえなかった鳥の羽ばたく音や虫の鳴き声、風に揺られた草木の擦れる音が響き出す。

そのことに2人はまるで先程の時間が停止していたかのような錯覚に陥った。

「……リンス」

「……解っていますよ」

ギルの視線を受けたリンスは頷き、先程の出来事を別行動している2人を知らせる為に動きだすのだった。

人と妖の者の二日目

ギルとリンスが異変に気付いた頃

「オラア！」

「シッ！」

レインとエルは5匹の狼と戦っていた。が、戦っているのは唯の狼ではない。切り伏せても、矢で射止めても効かぬとばかりに執拗に食いついてくる。……いや、実際に二人の攻撃は効いてなのだろう。頭を斬り飛ばし、矢で心臓を貫いても死なない姿はまるで

「アンデッド不死つてか？」

跳躍して向かってきた狼をローリングソバットで蹴り飛ばしながら面倒だと舌打ちする。

「不死？いえ、あれは……」

普通の矢が効かないと分かった瞬間に武器を魔法に切り替え、火や風で動けなくなしながら高速で思考するエルは動いている狼とそうでないのを見比べ、自分の予想が確信へと変わるのを感じた。

「レイン！私に案がありますわ！！」

「その案は！？」

「思い切り跳躍してくださいー！」

「了解！」

文句一つ言わずにエルの言う通りに脚に魔力を溜めて、思い切り地面を蹴り跳躍。と同時にエルは風の魔法を行使して浮き上がり、木の頂上で詠唱を開始した。

「【氷よ 全てを凍えさせよ 怒涛の吹雪】！！！」

瞬間、エルの手から放出される大量の冷気が狼の群れに向かって吹きさらす。先程までいた地上は一瞬にして雪景色に変わり、見るだけで寒々としてくる。

「つと、凄いなこれ」

跳んでいたレインが自由落下から綺麗に着地し、辺りを見渡し白い息を吐きながら呟いた。

「これなら、例え操られていたとしても関係ありませんわ」

「……操られていたのか？」

風の魔法でゆっくりと降下して地面に足を着けたエルにレインは首を傾げる。その様子に頷き、思い出してもみなさい。と言葉を紡ぐ。

「動いていた狼とそうでない狼の違いがありました。それに気づきは？」

レインは首を横に振るう。

「動いている狼には体を纏う様に電気が漏れ、動かない狼にはそれ

がない。ということは 「

「なるほど、電気で操られてたって訳か」

漸く理解したと頻りに頷き、で？と視線をエルに向ける。

「操っていた黒幕を探すか？」

「いえ、どうやらそうしなくてもよろしいようですわ」

エルの視線を辿れば納得がいったと苦笑する。

「まさか、電気を纏う狐がお出ましとはな」

狼たちは狐に化かされたのか？と笑うレインを無表情ながら電気を撒き散らし威圧してくる狐。威圧された二人は手持ちの武器を再び構えた。

「行きますわよ？」

「おっつ！！..！」

再び戦闘の火蓋が落とされた。

人と妖の者の二回目 (前書き)

読者様は既に理解しているとは思いますが、一応言っておきます。

作者に伏線など無理である!!

人と妖の者の二回目

夢を見た。

何処か見知らぬ場所で俺の胸に頭を預けた少女が血の気が引いた蒼白な顔を精一杯動かし笑っている。見れば胸から腰にかけて斜めに深い切り傷を負い、止血する為に巻かれている白い布は赤黒く染まり、見るからに既に手遅れだとわかるほどの血が流れていた。

あはは、へましちゃいました。

蒼白に笑う少女は余りにも痛々しく、迷惑を掛けないように無理矢理明るく努めていることが見てとれる。

ああ、でも御師匠に怪我が無くて良かった。

そう口にする少女の頬に水滴が落ちる。

……あはっ、御師匠が泣くなんて天変地異でも起きそうですね。

うるさい。

そう口に出した言葉は掠れて覇気は無かった。すると少女は笑っていた表情を一変させ、悲しそうに緩慢な動きで俺の頬に手を当てる。

泣かないでくださいよ。御師匠が泣いたらわたし……、

悲しいから。

『ッ!?!』

目が覚めた。

呼吸は荒く、手汗が異常な程に湧き出てくるのが分かる。ここ最近1人になってから寝起きが悪い。見た夢は思い出せないが、何故か無性に腹が立つ。

『……なんだってんだ』

髪をガシガシと掻きながら零れた溜め息はいつもより少し長く深い。

……顔、洗ってくるか。

今の自分は随分と酷い顔をしていることだろう。現在の自分の表情を思い浮かべてから気持ち切り替えるように頭を振り、緩慢な動作で立ち上がる。

一瞬ふらりと目眩を起こしたが、すぐに元の調子に戻ったのを確認。

『……はあ』

溜め息一つ零しながら、今度はしっかりとした足取りでその場を後にした。

*

「はああああ!!」

左から右へ、右から斜め左下に、斜め左下から右上へ、右上から斜め右下に、斜め右下から斜め左上へと流れを意識したさながら六芒星を描くように剣を振るう。

しかし、雷を纏う狐　雷狐　は最小限の動作で避けて時折剣技を縫うように飛んでくる矢を電撃で逸らし破壊する。

「レイン！」

エルの一声を合図に横に跳べば、先ほどまでいた場所はカマイタチによって切り刻まれていた。

「……………」

そのカマイタチすら軽く避け、退屈だと言わんばかりに欠伸をもらす雷狐。その様子に少しカチンときたエルは手を掲げ詠唱を唱える。

「【氷よ　全てを凍えさせよ　沈黙の氷棺】!!」

掲げていた手を振り下ろすと同時に透明な棺が現れ、雷狐を一瞬で閉じ込めた。

「フフフ……………出れるものなら出てみなさい!!」

「……………」

怪しく笑うエルに頬を引きつらすレイン。そのことに気付いたエルはわざとらしく咳を一つ。

「ま、まあこれにて一件落着　」

そこまで言っ言葉が途切れる。

ピシッ

さして大きくもない　だが、静かな森によく響くそんな擬音。

エルはあり得ないモノを見たかのように口を開き、さながら空気を欲する鯉のようである。声もでない。否、^{いな}だせない。それほどまでに衝撃的で仕留めたと確証があったのだ。それは隣にいるレインも同じ。

【敵の死を確認せぬその愚行。貴様らは三下か？】

戦いはまだ終わらない。

魔と獣の者の二回目 (前書き)

二話連続更新

魔と獣の者の二回目

時刻は昼過ぎ。暑くも寒くもない森を疾走する影が二つ。数歩前を走っている少女が険しい表情で片手を上げ停止。それに続くように少年も停止し、前方を警戒する。

「ギル君」

「……了解」

頷くと同時に突き出した手から連射された黒い矢は直線上に生えていた木をなぎ倒しながら進み、一拍置いて爆発。土煙が舞い、視界不良の前方を見据えいつでも動ける様に二人構えた。

しかし二人の予想に反して特に何も起きず、時間は止まらないままに過ぎて行く。

時間が経てば土煙は時折吹く風に流され、前方が少しずつクリアになってきた所で二人は今更ながら思う。

先程までいた気配、何処に消えた？

疑問と困惑を隠せない二人の後方から気が抜けるような欠伸が漏れた。とほぼ同時に地面を強く蹴り一瞬で散らばり隠れたのは日

頃の訓練の賜物だろう。

【くああああっ……んん？もう隠れてもうたんか】

日頃の訓練が如何に大事かを再確認したりリンスの耳に届いたのは「いやあ、残念残念」と然して残念そうでもない腑抜けた声色。敵の目的は何なのか……、なんて真面目なことを考えていた二人は思わずズッコケそうになったが、なんとか踏ん張り、木の上、草木の間から自分たちが敵対するモノを初めて視界に収めた。

【つい久しぶりの実体化やったから眠ってまふわあああ……っ！】

またもや欠伸。眠たそうに目を擦っている。……光沢に包まれた獅子が。

「（……ふえええええ！動物が、喋ってる！？）」

もし第三者がいれば確実にリンスは言ったことではない。お前もある意味獣だろうが。とツッコみが入るところのだが残念ながらツッコむ人物はいない。もう片方は驚いた様子も見せずに今か今かと出撃のタイミングを見計らっている。ある意味、この中で一番冷静であつたり。

【アカンアカン。つい欠伸漏らしてまうわ。ええっと、取りあえずお二人さんは初対面やし自己紹介するつてのが礼儀やんな。…こほん。わいの名は『光陽』】

アンタ等二人を殺すモンや。

人と妖と雷獣 (前書き)

二話連続更新

人と妖と雷獣

雷狐が見据える直線上を異常な熱量を秘めた電撃が放射される。

その姿は言うならば【超電磁砲】。

円形のそれは地を抉り、森を焼き、余波で辺りを吹き飛ばした。

「……なんつつか、ありえねえだろ」

何度目かの超電磁砲を咄嗟に避けたレインは雷狐の死角にあたる木の陰に身を潜めて思わずため息をこぼす。

あれは、明らかに反則だ。

発射するまでのタイムラグはなく、威力も十二分。そして何より連射可能で魔力消費の疲れが見えない。

ぶっちゃけた話、勝てる見込みがないのだ。

「【風よ 全てを吹き曝せ 風塞の竜巻】」

どうやって敵を倒したものかと思考を巡らせていた時に、凜とした声が耳に届く。

瞬間、雷狐を閉じ込めるように竜巻が発生。それに続く詠唱。

「【雷よ 全てを轟かせよ 雷息の咆哮】」

刹那、先程の超電磁砲と全く同じモノが上空から竜巻の中心に向か

って発射された。

「ああ ……なんか色々とかカシイだろ」

翔がエルは根っからの【魔法使い】って言ってたけど、相手の技を一回見て自分も使えるとか……マジ反則。

しかも、エルの放った技の被害よはで木や岩が俺に向かって飛んでくるので堪ったものではない。視界を遮られると困るのは修行で身に染みているので、剣の刃を覆うように魔力を素早く纏わせる。そして飛んでくる物体を見定め、縦と横を描くように剣を振り抜いた。

「【十字斬り】」

呟きと同時に纏っていた魔力が三日月状の飛ぶ斬撃となり、飛来してくる物体を全て切り刻んでいく。自分ながら、この技何度見ても気持ちがいいな。スッキリする。もっとやりたい。

「……………この言葉だけだと危ない奴みたいだな」

閑話休題。

……………とりあえずエルと合流してさっさと逃げるとしよう。

上空で高笑いしている仲間に頭を抱えつつ、未だ倒れていないである敵の方を一瞥してから駆け出した。

Side ????

剣士と魔法使いの子供が去っていく後ろ姿を見送り、姿が見えなくなったところで木の陰から身を乗りだし瓦礫の山に近づく。

【いつまでも寝てる気ツスカ?】

瓦礫の山に向かって声をかければ、一拍置いて瓦礫が吹き飛び埋もれていた雷狐が姿を現した。

【うむ?何故お主がいる】

【アンタの監視ツス】

即答すれば、そうか。と然して気にした風もなく頷き二人の子供が去った方向を眺める。表情こそ普段と変わりないが、抑えきれない獰猛な雰囲気にはやれやれと首を振るった。

……人と妖の子供よ、君たちはとんだ化け物に目を付けられたみたいツスね。

くつくつと笑う雷狐に呆れた視線を送りつつ、僅かながら去った子供に同情したのだった。

人と妖と雷獣 (後書き)

最近恐ろしいぐらい更新速度が遅い……不定期更新のタグをつけた方がいいのでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4284k/>

異世界の彼方へ

2011年11月1日05時26分発行